

とある葦毛のウマ娘

乾燥海藻類

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくあるオリ主もの。

史実とは出走レース、レース結果が異なります。

ご都合主義、独自設定、独自解釈あり。

また開催レースやレース場について、史実とは合致しない場合があります。例えばホープフルステークスや大阪杯（GI）、阪神レース場の坂など。

他にもありますが、基本的に現在の状況を参照しています。ご了承ください。

目次

第01話	葦毛のウマ娘は走らない？	
1		
第02話	早まるメイクデビュー	8
第03話	メイクデビュー	14
第04話	第2戦	21
第05話	アクセント	26
第06話	病院にて	30
第07話	バ群恐怖症	36
第08話	絶望の色	42
第09話	絶望の沼	46
第10話	絶望の底	55
第11話	愛の在処	60

第12話	シニアの始まり	67
第13話	大阪杯	74
第14話	天皇賞(春)	80
第15話	宝塚記念	86
第16話	大空に唄う	91
第17話	秋の始まり	103
第18話	世界との闘い	111
第19話	グランプリ	125
第20話	希望の未来へ	140

第01話 葦毛のウマ娘は走らない？

新人と呼ばれた期間はあっという間に過ぎ去った。これまで2人のウマ娘を担当したが、どちらも優秀で、重賞レースをいくつか獲得できた。

上位のドリーム・シリーズに昇格することは叶わなかったが、本人たちもそこまでの才覚を持っていないことは覚悟していたのか、満足してトレセン学園を卒業していった。

それがわずかな救いでもあった。

チームの設立を要請されたのは、2人目のウマ娘を送り出した頃だった。だが彼はあまり乗り気ではなかった。

自分が器用ではないことは自覚している。いままで専属でやっていたのも、1人のウマ娘に注力するためだ。

チームとなれば最低でも5人のウマ娘の面倒を見なければならぬ。必ず中途半端な育成になる。

それならばトレーナーではなく、教導官になる方がいいと思っていた。教導官とは、トレーナーを持たないウマ娘たちに基礎訓練を行う職業だ。

男は選抜レースを観戦していた。ウマ娘を担当し始めてからも、選抜レースには欠かさず足を運んだ。スカウトするつもりはなくても、未来のライバルになるかもしれないウマ娘をチェックするためだ。

この日のレースを見終わり、男はベンチに腰かけて空を眺めていた。トラックの喧嘩はすでに治まっていた。

「あの、ちよつとええですか？」

そろそろ帰るかと思いを浮かしかけた時、横手から声がかかった。

声をかけてきたのは、小柄な葦毛のウマ娘だった。体操服姿なのを見れば、選抜レースに参加していたウマ娘だろう。そういえば、最後の方のレースで走っていたような記憶がある。

「というか、よくよく思い出してみれば、過去の選抜レースでも見覚えがあった。」

「ああ、何かな？」

「ウチ、タマモクロスいいいます。あの、ウチのトレーナーになってくれませんか？」

唐突な逆スカウトに、男はきよとんとししながらも、トレーナーとしての本能で目の前のウマ娘を見定め始めた。

（身長は130ちよいだが、成長期だからな。これから伸びるかもしれん。脚は長い、細い。脚だけではなく全体的に華奢だな。……なにより、葦毛だ）

——葦毛のウマ娘は走らない

最初に誰が言ったかは定かではないが、そんな言葉がある。

そしてもうひとつ。

——小柄なウマ娘は大成しない

これも誰が言ったかは分からないが、トレーナーならば一度は聞いたことのある言葉だ。

彼女はそのふたつの要素を見事に満たしている。

(この時期にトレーナーが付いていないということは、売れ残りか)

今は年度末の3月だ。年に4回行われる選抜レースの、最後の回でもある。

「なぜ俺を選んだ？」

「担当したウマ娘全員が重賞レースを取ったって聞いたからです。んで、今フリーやつて」

「全員といっても2人だがね」

自嘲するように男は笑った。

(専属が許されるのも、おそらく次で最後だろう。常識に喧嘩を売るのも悪くないか)

改めて目の前のウマ娘に目を向ける。体格に優れているとはいえない。しかし目が気に入った。ギラギラとした瞳。諦めない者の目だ。挑戦者の目だ。

(それに名前もいい。タマモクロス。これも何かの縁か)

「いいよ。キミと契約しよう」

「え!? ホンマに!」

「キミが驚いてどうする」

「あ、すんません。予想以上にすんなりいったもんで、つい」

タマモクロスはポリポリと頭をかいた。

「とりあえず、こちらでも自己紹介をしよう。トレーナーの高松だ。よろしく、タマモクロス」

「は、はい。よろしゅうたのんます」

差し出された右手を、タマモクロスはしっかりと握り返した。

今は春休みではあるが、全寮制のトレセン学園では帰省せずにトレーニングを行う者たちも多い。タマモクロスもそのひとりだった。

本格的なトレーニングは学期明けからとし、高松は基礎的なトレーニングメニューをタマモクロスに課した。

その間に契約に必要な書類を学園側に提出し、タマモクロスの詳細なデータを申請す

る。これは正規契約したトレーナーにしか行えない。

「まったく勝てないというわけではなさそうだな」

この一年間に行われたタマモクロスの出走した模擬レースを見終わり、高松はぼそりとつぶやいた。

エリートが集うこのトレセン学園にも、いやエリートが集うトレセン学園だからこそ、一度も勝てないウマ娘というのもある。

それでも頑張つて努力し、メイクデビューまでこぎつけるが、それでも勝てない。未勝利戦でも走り続けるが、勝てない。

そして一度も勝てないまま、トレセン学園を去って行く。

そういったウマ娘もいる。いや、そういったウマ娘の方が多いのだ。勝てる方が圧倒的に少数派なのがレースの世界なのだ。

タマモクロスの勝率は悪い。精々が1割程度。10回走って1回勝てるかどうか。

「気性難……か?」

レース中の作戦が安定しない。逃げたり追い込んだり、先行したり後方に構えたりと落ち着きがない。

自分に合う策を模索している感じに見えたが、直近のレースでも先行か差しかで迷っているふしが窺えた。

「自信を持って策を実行してないんだな。迷いがあるから踏み込めない、踏み切れない。結果、仕掛けどころを見失う」

結局のところそれに尽きる。この頃のウマ娘たちは、一部の天才たちを除いてどんぐりの背比べ状態だ。身体的な能力よりも、レース運びの上手さで勝敗が決まる。

つまりタマモクロスはレース運びが下手だった。

「ふいふ。終わったで〜」

高松が思索にふけていると、部屋のドアを開けてタマモクロスが入ってきた。

「しかし部屋を貰つとるなんて、やっぱ実績あるトレーナーなんやな」

「チームを作ればもつとでかい部屋が貰えるんだがな。そこに寝ろ。マッサージを始めるぞ」

「ういっす」

部屋の脇にある簡易ベッドに寝転がると、タマモクロスは脱力して高松の施術に身を任せた。

「なあトレーナー。ウチもつとマシントレとかガンガンやりたいんやけど」

「アホか。成長期にそんなもんやったら身体壊すぞ。しばらくは自重トレだけにしとけ」

「んふ、わかった」

次第にタマモクロスが目蓋が下がっていく。程なくしてスウスウという寝息が聞こえてきた。

第02話 早まるメイクデュー

最適なフォームというものは人それぞれ違う。タマモクロスはこれまで一般的なフォームで走っていた。だがそれはタマモクロスに合うフォームではなかった。

「そうだー、いいぞ、膝と蹴り足を意識するんだー」

タマモクロスは脚が長い。ならそれに適したフォームで走らなければ、本来のスピードは出ないし、スタミナも多く消費してしまう。

高松がやった最初のトレーニングは、フォームの確立、レースの勉強、そして基礎トレスタイルという基礎固めだった。

脚質はレース展開の不利を受けにくい先行型にした。慣れ始めたら差しにも対応できるようにしたいが、詰め込みすぎるのも良くない。

「ちゅーかうちはこんななりやし、先行のポジション争いはメタクソにやられてんのやけど……」

「そりゃ体幹がしっかりしていないのと、中途半端なところで争ってるからだろう。位置取りの有用性はこれから教える」

好位の解釈は多々あるが、一般的に接触を避けて全体の状況を把握できる場所が理想

だ。それはやはり経験が必要になってくる。

そういった基礎的な訓練を徹底して続けるうちに、季節は暑さを感じる7月になっていた。

「もうデビューの季節やんなあ〜」

チラツチラツと高松の顔色を窺うようにタマモクロスがぼそりとつぶやく。先月からメイクデビューが開催され、何人かのウマ娘がデビューを飾った。ウマ娘たちがそわそわし出す時期だ。

「トレーニングの進捗にもよるが、デビューは1〜1月頃を考えている」

「……それって遅すぎへん？ 模擬レースの勝率も上がってきたんやけど」

「自信をつけるのはいいことだが、練習と本番は別物だ。一度本物のレースを走れば、模擬レースが遊びだつてことが分かる」

「遊びつてのは言い過ぎちやう？」

「模擬は所詮模擬でしかないつてことだ。そのうち分かる」

きつぱりと言われて、納得したわけではないが本物のレースを知らないタマモクロスは黙るしかなかった。とりあえずデビューはまだ先だということが分かって、話題を変えらる。

「もうすぐ夏休みやけど、合宿とかさせえへんの？」

「あれはチームじゃないと抽選権すら貰えないからな。逆にそういうやつらが合宿に行くことで学園の施設が使いやすくなる。坂路とかプールとかな」

個人で合宿を行うことも可能だが、この時期はどこも混んでいるし、そもそもまだ合宿をやるような段階でもない。それならば設備の整った学園を活用する方がメリットがある。

「お盆休みは取るから、その時に帰省するといい。確か実家は関西だったな」

「そない気を遣うてもらわんでもええけど」

「俺が休みたいんだ」

「さいでつか」

なんだかんだ言ってもローティーンの少女だ。家族に会いたいという気持ちもあるだろう。そこまで遠い距離ではない。一週間くらいのオフなら問題ない。筋トレやジョギング程度なら向こうでもできる。

夏休みに入ってもやることは大して変わらない。坂路とプールの頻度が増え、たまに併走を頼んだり頼まれたり、それなりに実入りの多い夏休みだった。

新幹線の込むお盆前にタマモクロスを送り出し、高松は部室の椅子に腰かけた。タマモクロスに休みたいと言ったが、当然それは本意ではない。これを機に、溜まっていた書類を整理する。またライバルたちの動向もチェックしなければならない。

敵を知らずに勝てるほど、タマモクロスは強くないのだ。

タマモクロスには一週間のお盆休みを与えてある。今日はその4日目だ。高松は部屋で提出書類を纏めていた。

とそこで、ノックもなく唐突に扉が開かれた。一瞬ドキリとしたものの、高松は視線だけでそちらを見やる。

立っていたのは見慣れたウマ娘だった。

「随分早いお帰りだな。何かあったか？ 連絡してくれれば……」

「トレーナー。ウチをデビューさせてくれ」

挨拶もなく、タマモクロスは鬼気迫った形相で高松に詰め寄った。デビューについては以前にも語った通りである。その予定に変更はない。高松はそう伝えようと口を開こうとしたが。

「金が要るんや」

そんな隙を与えず、タマモクロスは直截ちよくせつに告げた。

「……いくらだ？」

「500万」

学生が、ましてや中等部の学生が必要とするような金額ではない。考えられるのは身内の借金がいふが、高松は敢えて追求しなかった。

「それだけが理由なら、俺が用立ててもいい」

「それはあかん！」

タマモクロスの絶叫に、緊張が走る。

「声荒立ててすんません。けどトレーナーとはええ関係でいたいんで」

「そうか」

金銭トラブルが原因で人間関係が壊れるというのはよく聞く話だ。それでなくとも、無意識に優劣がついてしまう。高松は気にしないが、タマモクロスは気にするのだから。そういった精神的な負荷はトレーニング効率にも影響するし、引いてはレースの結果にも影響を与えるかもしれない。

ウマ娘というのは、身体構造だけではなく精神構造も人間とは少し違っているのだ。

「2回勝つ必要があるな」

賞金が丸々ウマ娘に入るわけではない。諸々差つ引かれて半分といったところだろう。メイクデビューと、その後にもう一戦勝つ必要がある。

「分かった。デビューの手続きを進めよう」

「ありがとうございます！」

タマモクロスは花が咲いたような笑顔を見せ、高松に頭を下げた。

第03話 メイクデビュー

タマモクロスを選べることは簡単だ。レースを選んで出走申請を行うだけである。

だがこのレースを選ぶというのがなかなか難しい。

(タマモがベストパフォーマンスを発揮するには、最低でも1600m、できれば2000m欲しい。コースは芝の方がいいな)

タマモクロスは脚が長く、筋肉はしなやかで無駄がない。これは中長距離向けのスタイルだ。だからこそ、比較的距離が短く設定されているメイクデビューでは分が悪い。

(8月第3週に新潟で1800mがある。そして最終週に1600mと1800m、小倉で1800mと2000mか)

新潟レース場は坂の高低差が小さく、最後の直線が長い。

小倉レース場は坂の高低差が大きく、最後の直線が短い。

(末脚のキレも鋭くなってきた。いけるはずだ)

あれ以来、タマモクロスはいつにも増してトレーニングに励むようになった。その熱意がこちらにまで伝わってくる。

なにより意識が変わった。精神こころの在り方は勝負事レースに大きく影響する。そういう意味では、タマモクロスはひとつ壁を破った。

勝たせてやりたいと高松は強く思う。

翌日、高松はタマモクロスに最後の確認おこなを行った。

「新潟でデビュー戦だ。芝の1800m。来週か再来週、どっちがいい？」

「そりゃ早い方がええで。来週や」

タマモクロスは意気揚々と答えた。

そして翌週、URAから送られてきた出走表を見て、メンバーと枠順を確認する。高松はすぐさま出走メンバーのデータデータを紙に起こした。

それをタマモクロスに渡し、仮想レースを行う。

「よう調べとるなあ。脚質やクセまであるやん」

「大したことじゃないさ」

同期でライバルになりそうなウマ娘はあらかじめチェックしてある。ほとんどのウマ娘はトレセン学園のトラックコースを使用して練習を行うため、ライバルの動向チェックは意外と楽にできるのだ。

「タマモの枠順は4番。真ん中あたりだな」

「先行で行くんか？」

「スタート次第だな。良ければ前へ。悪ければ後方に構える」

「適当やな」

「重要なのは焦らないことだ。当たり前だが、このメンバーはみんな初めてのレースだ。

ミスをした方が珍しい」

「ウチはミスらへんで」

「みんなそう言うんだよ。ミスはしてもいい。するものだと考えておけば気持ちが楽になる。さつきも言ったが、パニックになるな。それが一番マズい」

「ん、了解や」

タマモクロスは口を尖らせながらも素直に頷いた。

(気合が空回らなければいいが……)

高松は頭痛を抑えるように、こめかみを指で押した。

8月3週の日曜日、高松はトレセン学園から借り受けた車で新潟を目指していた。助手席ではタマモクロスが目を閉じて仮想レースを行っている。

「——よっしゃー！」

カッと目を見開き、タマモクロスが快哉を上げる。

「勝ったか？」

「2バ身差で優勝や」

タマモクロスはニカツと笑ってVサインを作った。高松は横目にそれを眺めて小さく笑った。

こうして勝利のイメージを作ることには意味がある。漠然としたイメージではなく、正確なデータに基づいたイメージは現実に近くなり、現実化する。

スピリチュアルな分野になるが、ポジティブなイメージはポジティブな現実を引き寄せるのだ。

レース場に到着すると、タマモクロスは簡単な検査を受けて控え室へと通された。数時間後にはレースが始まる。

レース用のシューズに履き替え、タマモクロスはぴよんぴよん飛び跳ねる。

「やっぱ軽いなあ、この蹄鉄。付けてへんみたいやわ」

「アルミ合金だからな。重さは普通の蹄鉄の三分の一だ」

いつも付けている蹄鉄は、学園から支給されるものよりも2倍の重さがある。つまりタマモクロスが感じているのは六分の一の重さになる。浮かれるのも当然だ。

発走時刻が近くなり、タマモクロスはターフへと向かった。

高松はゴール付近の関係者ゾーンへと向かう。

念願のメイクデビューを前に、タマモクロスの胸はいつになく高鳴っていた。

(ふわふわしとんのは、蹄鉄が軽いせいだけやないな)

タマモクロスは瞳を閉じて両手を広げた。そのまま胸の前まで両腕を移動させる。手の平は寸分の狂いもなくピタリと合わせられた。

(身体はイメージ通りに動いとる。これは悪い緊張やない)

『本日の第5レースは芝1800メートルのメイクデビュー。うら若き乙女たちのデビューであります』

アナウンサーが丁寧^に一人ひとりを紹介していく。自分の名前を呼ばれてタマモクロスは大きく手を振った。

そのまま4番のゲートに入り、スタートを待つ。

運命のゲートが——開かれた。

一番に飛び出したのは白い影。タマモクロスは会心のスタートを決めた。だがあまりに良すぎるスタートにタマモクロスは一瞬不安になる。

前に他のウマ娘はいない。この新潟レース場は直線^{直線}が長い^{直線}ため、コーナーは2つしかない。最初のコーナーまで約750メートルの向^{直線}こう正面。このまま行^{直線}つていいのだ

ろうか。

——焦るな。迷った時は脚に聞け

タマモクロスの脳裏に高松の言葉が蘇る。

(ウチの脚は、前に行きたがつとる。無理に抑えて下がるより、ここはこのままでええ)
意志を持ったように前へ出る脚に任せて、タマモクロスは走る。その外側から7番のウマ娘が駆けて行った。

(あれは逃げるはずだったやつやな。ウチが先頭を取ったもんで、焦って出てきよったんか)

さらに2人のウマ娘がタマモクロスをかわして前に出た。ただでさえ速いペースで走っているタマモクロスをかわしたとなると、前の3人は明らかにオーバースペースで走っていることになる。

最初のコーナーを曲がる。先頭のウマ娘の脚が鈍ってきた。

2番目コーナー、つまり最終コーナーを曲がる。先頭のウマ娘はまだ粘っているが、息も絶え絶えで今にも崩れ落ちそうだ。

無理に追いかけた2人のウマ娘も、最後の直線を駆け抜ける力は残っていなかった。

タマモクロスは悠々と前のウマ娘をかわし、一番にゴールへと飛び込んだ。

メイクデビューを勝利で飾り、タマモクロスはご機嫌だった。多少のイレギュラーはあったものの、ほぼ理想通りのレース運びができた。

帰りに新潟名物のへぎそばとのどぐろ炙り丼を食べ、笹団子を宅配便で実家に送った。

「まああんまり浮かれてもおれへん。あと一回勝たないかへんからな。次はいつになりそうなん？」

「そうだな。あまり負担はなさそうなレースだったが、連闘は避けたい。再来週か、その翌週だな」

「ほうか。心配せんでも兜の緒を緩めるつもりはあれへんよ」

タマモクロスは気を引き締めて拳を鳴らす。

窓から流れる景色を眺めながら、レースの疲労と満腹感が重なり、強烈な睡魔に襲われた。

高松に促され、タマモクロスは助手席で寝息を立て始めた。

その寝顔をチラリと眺めて、高松は小さく笑った。

第04話 第2戦

来週で新潟、小倉、札幌開催は終わり、再来週からは中山、中京での開催となる。

中山の特徴は何といっても直線の短さだろう。東京、中山、京都、阪神の中で最も短い310m。しかしコース全体の高低差は、URAが管理するレース場の中で最大であり、瞬発力だけではなく相応の持久力も要求される。

中京の特徴は、中山以上にパワーを必要とするコースだということ。最後の直線で、中山には及ばないが急坂があり、それを駆け上がった後さらに200m余りの直線があるため、かなりタフなコースだ。

「しかし、分かっているが出られるレースが少ないな」

この時期はジュニアクラスならメイクデビューや未勝利戦が多く、勝ち上がったウマ娘が出られるレースがほとんどない。

9月2周目のアスター賞（中山第9レース・芝1600m）

9月4周目の野路菊ステークス（中京第9レース・芝2000m）

「こんなところか。さて、どうするか」

スピードとスタミナは重点的に鍛えてきたが、正直パワーは後回しにしてきた。まだ

骨も固まっていない若い時代に無理をすると故障の原因となるし、日本のレースは年々高速化しており、欧米のような熾烈なポジション争いがほとんどない。

特にジュニアクラスでは、身体や考え方が若いウマ娘が多く、どうしてもパワーは後回しになってしまう。

「……やはりアスター賞か」

アスター賞は1勝クラスだが、野路菊ステークスはオープンクラスとなる。勝つ可能性を考えれば前者の方が確実だろう。

「よし、決めた」

勝負は中山レース場。芝1600メートル。

レースが始まるゲート前。タマモクロスはぐるりと周囲を見渡した。

（トレーナーの言うた通りや。みんな顔つきが違うわ）

前回のメイクデビューに出走したメンバーは、みんな不安の色が強かった。だが今日のメンバーには自信が表れている。

メイクデビューを勝ち上がってきたという自信が。

出走人数はタマモクロスも含めて11人。割り当てられたゲートは外枠の9番。

係員に促され、タマモクロスがゲートに収まる。

程なくしてガシヤコンとゲートが開いた。

スタートは綺麗な横一線となった。

(さすがにみんな上手いわ。さて、どない進めるか)

そうこう考えている内に、すぐさま最初のコーナーに差し掛かる。タマモクロスは3番手でコーナーに突入した。

(1600mは長いようで短い。油断しとつたら、あつちゆう間に終わってまう)

「ねえねえ、このペースってちよつと速すぎない?」

「あん?」

いきなり内側を走るウマ娘に話しかけられて、ビックリしつつもタマモクロスはそのウマ娘の真意に気づいた。

(これがささやき戦術つちゆうやつか。トレーナーには聞いたとつたけど、ホンマにおけるんやな。1番人気にんきもんは辛いで)

ここでタマモクロスは高松の言葉を思い出す。

——中山の芝1600mはコースの有利不利がハッキリと出る。スタート直後にコーナーがあるため、外枠だとかかなりの距離ロスが強いられる。そして——

（ハイペースになりやすい。そのため先行のウマ娘が残りやすい。こいつはウチを後ろに下げたいんやな。最後に慌ててももう遅い。直線の短い中山こじじゃあ差しがとどかへんつちゆう寸法か）

卑怯とは思わない。走りながら喋るといふのは、なかなか体力を消耗することだ。それでも、1番人気のタマモクロスを戦線離脱させることができれば、自分が勝利する確率はグッと上がる。

（勝利に貪欲なんやな。その姿勢は嫌いやない。やが乗つてやるわけにはいかへん）

それよりもタマモクロスが気になるのは先頭で逃げるウマ娘だった。ハイペースⅡオーバーペースとは限らない。このまま逃げ切られる可能性だってある。差を広げられるのはうまくない。

「そうやな。なら置いてかれんようにせな！」

「——なっ!？」

タマモクロスはひとつギアを上げた。後ろから舌打ちの音が聞こえる。

最後のコーナーが見えてきた。タマモクロスは3番手。先頭との差は5バ身くらい。

（悪うない。ここから徐々にスピード上げてって最後にドカンや!）

最後の直線310メートル。2番手のウマ娘をかわし、残りはスタートから先頭を走

り続けている逃げウマ娘。

(思ったほどスピードが落ちやらん！ 勝負は坂か！)

ゴール手前180mから始まる中山名物の急坂。ここが勝負所になる。

疲れ切った身体にムチを入れ、最後の難関に足を踏み入れる。

(確かに難関言うだけあるな。けど、なみはや大橋に比べたら屁みたいモンや！)

先頭のウマ娘の脚が鈍った。タマモクロスはギアをトップまで上げ、一気に坂を駆け上げる。

先頭のウマ娘を並ぶ間もなくかわし、タマモクロスはそのままゴールした。

第05話 アクシデント

タマモクロスの現在成績は2戦2勝。勝ち方も悪くない。どちらも快勝と言ってい
いだろう。

「いけるか……GⅠ」

高松も欲が出ていたのだろう。GⅢやGⅡではなくGⅠを期待した。

ジュニアクラスのGⅠレースは3つある。

朝日杯フューチュリティステークス

阪神ジュベナイルフィリーズ

ホープフルステークス

どれも格付けは同じだが、来年をどのルートで進むかで出走するレースも変わって
くる。

クラシックロードを進むのなら、皐月賞と同じコース、同じ距離のホープフルステ
ークスがいいだろう。

トリプルティアラを目指すなら、桜花賞と同じコース、同じ距離の朝日杯F Sか阪神
J Fが選択肢となる。

「この辺りは一度話し合うか。それよりも、一度差しの経験を積んでおくべきだな」

この2戦は先行で勝ってきた。時代の主流が先行ということもあるし、高松自身の好みだったというのものもある。だが先行一辺倒ではいずれ対策される。手札は多い方がいい。

「10月に1度走って、12月にGIへ出す」

高松はそう方向性を決めた。

高松が選んだのは、10月初週に中山レース場で開催される芙蓉ステークスだった。

「3週ぶりやなあ、中山くん」

中山のターフをポンポンとたたく。前回は1600mと物足りなかったが、今日は2000mも走れる。

最近は調子もいいし、タマモクロスは負ける気がしなかった。

高松がこのレースを選んだのには色々理由があるが、ひとつに逃げウマ娘がないということだった。

レースで大逃げが出ると、差しや追い込みのウマ娘が仕掛けどころを見失うケースが往々にしてある。その辺りは状況把握力がものをいうのだが、それを期待するにはまだ

まだ経験が浅すぎる。

高松の予想通り、レースはほぼ一団となって進んでいった。

現在タマモクロスは8人中内側の6番手。

第1コーナーを回って第2コーナーへ。ポジションの大きな変更はない。

向こう正面の坂を下って、その勢いがついたまま第3コーナーへ突入する。

そこで事件は起こった。

外側を走っていたウマ娘が遠心力に負けまいと身体を内側に傾けた。その時に足を滑らせ、内側に向かって勢いよく倒れ込んだ。

「——ッ!？」

仕掛け時を考え、前の状況ばかりを窺っていたタマモクロスは外側の異常に気づくのに遅れた。

肩に衝撃が走り、小柄な身体は簡単に吹き飛ばされた。内ラチがぐにやりと曲がる。痛みに顔を歪めるが、それ以上に事態は深刻だった。

浮いている。そう自覚した時には、すでに芝の青さが瞳いっぱい広がっていた。

(頭……守らな！)

咄嗟の判断で両手を頭に持っていく。直後に訪れた、全身を叩きつけられる痛み。

「——カハッ!!」

肺から空気が押し出される。

そこでタマモクロスの意識は暗転した。

第06話 病院にて

走ることが好きだった。

そして自分は速いと思っていた。

いつかG1レースで優勝するのが夢だった。

日本一のウマ娘になるのが夢だった。

それが難しいと感じたのは、小学校高学年の頃。中央トレセン学園の入学金と授業料と、寮費やその他諸々にかかる合計金額を知った時。これは無理だと思った。

それでも走ることを諦めきれなかったタマモクロスは、園田のトレセン学園に進学したいと母に告げた。

そしたら母は「とりあえず中央を受けてみたら？」と軽く言った。

受験料だけなら大した金額ではない。それでもタマモクロスにとっては大金だったが、入学金や授業料に比べれば圧倒的に安い。

最初は「どうせ行かへんのやからええねん」と断っていたが、勝手に願書を提出され、記念受験ということでタマモクロスは上京した。

筆記テストと体力テストは、そこそこ上手くいった。面接では緊張してどう答えたか

覚えていないが、大きな失敗はなかったと思う。

そして1200メートルのダートでレースを走った。そのコースが選ばれたのは、願書に得意距離を1200メートルのダートを書いたからだ。

その頃のタマモクロスが走ったことがあるのは、地元の市営レース場だけで、そこが1200メートルのダートコースだったからだ。芝コースを走ったことは一度もなかった。

結果は10人中4着と、何とも言えない結果だった。

受験生のレベルの高さを感じながら、内心でこれはあかんなどと諦めていた。だがどういうわけか、タマモクロスに届いたのは合格通知だった。

タマモクロスは三度書類を確認して頬をつねってみたが、間違いなくそれは合格通知だった。だが喜んでばかりもいられない。家の経済事情を考えれば、中央のトレセン学園に進むのは現実的ではない。

タマモクロスはやんわりと母に断りを入れた。

だが「子供がそんなこと心配すな！」とゲンコツを落とされてしまった。

結局タマモクロスは、「お金の当てはある。心配せんでええ」という母の言葉を素直に信じて、中央トレセン学園に入学した。

そこからは苦難の連続だった。地元では負け知らずだった自分が、クラスでは下から

数えた方が早いくらいに遅い。

コースを変えてみたり、脚質スタイルを変えてみたが、劇的に何かが変わったりはしなかった。あつという間に一年が過ぎた。

クラスメイトの大半がトレーナー契約を済ませていた。それが羨ましくて、悔しくて、情けなくて仕方がなかった。

練習方法が間違っているのかも思い、トレーナーを得たクラスメイトに練習メニユーを聞いて、それを真似てみたこともあった。

お盆には帰らなかった。正月にも帰らなかった。家族に顔を合わせるのが怖かった。春になった。2年生で最後の選抜レース。ここで1着を取る。取れなければ、道はさらに苦しくなる。

結果は3着だった。逃げるウマ娘を差せず、後ろからきたウマ娘に抜かされる。

相手が上手うわてだったなんて言い訳はしない。レースの世界は結果がすべて。ただ悔しさだけが残った。

タマモク羅斯は放心したようにコースの脇へと腰を下ろした。

どれくらいの間、そうしていたのか。聞こえてきたのは、トレーナーたちの声だった。

『あの人、まだフリーなのかな。実績はあるんだろう?』

『前に担当した子は、GⅡをいくつか取ったって聞いたわ』

『俺は担当したウマ娘全員が重賞を取ったって聞いたぞ』

『全員？ それってGⅠも？』

『いや、そこまでは……』

本人たちはひそひそ話のつもりだったのだろうが、ウマ娘の聴覚はしつかりと言葉を捉えていた。

渦中の人に目を向ける。そこにいたのは、これといった特徴のない男性だった。とても敏腕トレーナーには見えないが、タマモクロスはこれが最後のチャンスだと思い、意を決して彼に近づいていった。

「……………」

「ほれ」

「あ？ ああ、おおきに」

上半身を起こし、差し出されたマグカップを受け取る。甘い香りが鼻孔をくすぐった。口に含むと温かさが広がり、胃の腑にスルリと落ちていく。

タマモクロスはホツとため息をついて、マグカップを脇のテーブルに置いた。

「いや、ココアが飲みたいわけちゃうねん！　って痛たたつ」

「全身打撲だ。幸いにも骨折はなく、脳波にも異常はなかった」

「そう言われて、タマモクロスはようやく事態を呑み込めたようだ。」

「病院こほりにおけるいうことは、そういうことなんやな」

「ああ、そういうことだ。今日は病院に泊まって、明日もう一度検査する。それで何もなければ退院だ。それと、お母さんから連絡があつたから、あとで電話してやれ」

「お母かん。なんか言うとなつた？」

「心配してたぞ」

「……そつか」

後方に構えていたのは、不幸中の幸いでもあつた。巻き添えは最小限で済んだし、後ろから来るウマ娘に踏まれるようなこともなかった。

尤も、前方にいれば事故に巻き込まれることもなかったのだが、それを言い出せば切りがない。

極端な話、このレースに出走しなければ怪我をすることもなかった。

(俺の欲深が招いた結果か)

G Iレースで優勝することは、ウマ娘としてもトレーナーとしても目標のひとつである。それに焦点を合わせて、このレースを選んだ。G IIやG IIIを目標にしていれば、こ

のレースは選ばなかったかもしれない。

高松は謝罪の言葉を口にしようとしたが、結局はやめることにした。それで満足するのは自分だけで、タマモクロスはさらに気に病むだろう。そういう優しい子だと、高松は思っていた。

(幸い怪我の程度は重くない。切り替えていこう)

「また明日来るから、おとなしく寝るように。何かあったら我慢せずにナースコールしろよ。食べ物と飲み物ならその棚に入れてある。欲しい物があったら売店で買え。ここはトレセン学園と提携している病院だから、トレーナー^他の名前を出せばツケで買える。それと……」

「わーかった。一晩泊まるくらいで大げさなんや。ガキとちやうねんから」

「ふっ、そうか。じゃあまた明日な。おやすみ」

「うん。おやすみ」

彼女の笑みを見て、高松は安堵して病室をあとにした。

だが彼は気づいていなかった。タマモクロス本人でさえも。

悲劇の足音に。絶望の気配に。

第07話 バ群恐怖症

タマモクロスがまともなトレーニングに取り組めるようになるまで二週間を要した。12月のGIレースは見送る予定であったが、タマモクロスの強い希望で、一番日程に余裕が持てるホープフルステークスに出走を決めた。

開催までの約一カ月間、高松は念入りにタマモクロスの身体をケアし、追い込んでいく。怪我の後遺症もなく、万全の状態でレースに送り出すことが出来た。

少なくとも高松は自信を持ってそう思っていた。

そして来たる12月28日。中山レース場には大勢の観客が詰め寄せていた。ジュニアクラスを締めくくるレースでもあり、来年のクラシック戦線を占うレースでもある。

(さすがに粒ぞろいだな)

パドックに登場するウマ娘たちを眺め、高松は手早くデータをまとめていく。

(調子が良さそうなのは、ゴールドシチー、メリービュウティイ辺りか。マーティリアは少し入れ込み過ぎだな)

パドックが終わり、それぞれがゲート前に向かう。その途中で、高松はタマモクロス

に短く指示を出す。

「作戦は予定通り先行でいこう。警戒するのはゴールドシチー、メリービューティー。あとはレースの状況次第で臨機応変にな」

「了解。シチーは最近調子上げとるしな。油断ならん相手や。ほな、行ってくるで」

タマモクロスの調子は良い。だがそれはあくまで肉体面に限ったことだ。いくら高松でも、本人すら自覚していない精神面の異常を見抜くことなどできなかった。

フアンファアレーが鳴り響く。

唾を呑み込む音すら聞こえそうな静寂の中、ゲートが開く。

14人のウマ娘たちが一斉に飛び出した。

中山レース場2000mのコースのスタート位置は、第4コーナーを回った後、直線に入ったところにある。

つまり最初にホームストレッチを駆け抜けていくわけで、坂越えが2回あるということだ。

最初の坂は十分な助走距離があり、スタミナもある。だからといってここで必要以上にスタミナを消費すれば、二度目の坂で地獄を見ることになる。

タマモクロスは2番手で坂に突入した。好位に付いていると言っているいいだろう。だが坂を駆け上がり、第1コーナーに突入しても、タマモクロスは張り合うように外から

先頭を行くウマ娘をかわそうとしているように見えた。

(バカな。ここは無理をする場面ではない。後ろについてスリップストリームを活用する状況だ)

タマモクロスがそれを分かっているとは思えない。高松がもう少しよく観察すれば、タマモクロスの耳が頻りに動いていることに気づいただろう。まるで何かに怯えているような動きに。

向こう正面でタマモクロスは先頭に立った。

タマモクロスが逃げていることに観客はようやく気づく。興奮半分、動揺半分といったところだ。

いけるのか？ 大丈夫か？ 大丈夫だ！ いけるいける！

観客の声が高松の耳にもどいてくる。

(持つのか？ 持たせられるのか？)

不安だけが募っていく。タマモクロスがかかっていることは容易に知れた。ここから先がどうなるのか、高松には予想もつかなかった。

結局、タマモクロスが先頭を維持できたのは第3コーナーを抜けたところまでだった。

1人、2人と追い抜かれていき、3人目のゴールドシチーは愕然とした表情でタマモ

クロスをかわした。

タマモクロスは虚ろな顔で、14番目にゴールラインを通過した。

帰りの車中、ふたりは無言だった。

トレセン学園についた後も、タマモクロスは茫然としていたままだった。高松はそんな彼女を背負い、寮まで送って行った。

寮の玄関で待ち構えていたようなフジキセキにタマモクロスを渡し、冬休みいっぱい休養すると伝えた。

その後、高松は自室に戻り、今日の出来事を反芻した。

(発走直前まで変わったところはない。おかしくなったのはレース直後)

逃げなんて一度も練習したことはないし、こちらの指示に逆らってぶっつけ本番でやるような性格でもない。

つまり逃げざるを得ないような状況だったと考えるのが妥当だろう。

決定的だったのは、最終コーナーから直線にかけて抜かれた時、タマモクロスはほとんど目を瞑っていた。

生まれたての小鹿のように震えながら。

台風が至近距離で通過していくのを耐えるように。

(バ群恐怖症……か?)

練習では全く兆候は見られなかった。

観客の声、戦場の風、ウマ娘の氣勢、そういったものがないまぜになつて、レースという非日常を作り出す。

故に本番まで、本人も気づけなかったのだろう。

前例がないわけではない。稀代の逃げウマ娘と呼ばれた彼女も、後にバ群恐怖症だと告白した。

そのウマ娘はすべてのレースで大逃げを打ち、2番手に影すら踏ませなかった。それが衝撃的であり、だれもバ群恐怖症などとは思わなかった。

(タマモに大逃げは無理だ。かといって溜め逃げというのも現実的ではない)

バ群を引き連れて逃げる溜め逃げは、常に後方からのプレッシャーを受ける。それをコントロールしつつレースを支配し、最後の直線でもうひと伸びする、いわゆる逃げて差す戦法であるが、後方からのプレッシャーを受け続けるという時点で、タマモクロスは必要以上の体力を消耗するだろう。

(ならば追い込みしかないわけだが……)

前がダメなら後ろを取るといふのは、自然な流れではあるが、追い込みには大きなデ

メリットがある。それはレース展開に大きく左右されるということだ。

つまり、安定して勝てる作戦ではない。

(だがやるしかない)

状況を打開する方法は、これしか残されていないのだから。

第08話 絶望の色

年が明けた。それはすなわちクラシック戦線の始まりを意味する。

冬休みも終わり、今日は始業式。

トレセン学園は久しぶりに制服姿の生徒で溢れていた。

昼前には放課後となり、食堂で昼食を済ませたタマモクロスがトレーニングコースに姿を現す。

多少なりとも元気は取り戻しているようだった。

軽く前回の反省会を行った後、準備運動に入る。その様子を高松は不安気に眺めていた。

(自覚症状はなしか)

タマモクロスはただ調子が悪かったとしか思っていないようだった。バ群恐怖症などそうそう聞く病状ではないし、高松とて前例を知っていなければ、こうも容易く特定などできなかった。

ただひとり、連絡をよこして来たのは生徒会長のシンボリドルドルだった。業務以外ではほとんどつき合いのない彼女だが、一目でそれと見抜いたのは、さすがウマ娘たち

を統括する生徒会長といったところだろう。

(吹聴するような性格でもないだろうし、とにかくもう一度試してみるしかない)

バ群恐怖症である可能性は高い。その上シンボルドルフもそう見てはいるが、まだ確定したわけではないという淡い期待も抱いていた。それが希望的観測だとしても。

1月下旬。高松が選んだのは東京レース場で開催される条件戦だった。

(トレーニングで地力は上がっている。この面子なら優勝も十分に期待できる)

だというのに、高松の胸中では暗雲が渦巻いていた。

ゲートが開き、ウマ娘たちが走り出す。タマモクロスは少し遅れてスタートした。

(そうだ。それでいい)

追い込みの利点はスタートに気を遣わなくていいということだ。極端な出遅れはともかく、今回は最後方に構えろと命じてある。大外枠から内側の経済コースを走るには、少し遅れてスタートした方がいい。

前の方は一団となつていようだ。良い傾向である。タマモクロスの末脚なら一気にかわすことも十分に可能だ。

レースは大きな変化もなく、そのまま終盤に突入した。

(なぜ外に出ないッ!?)

高松の位置からでは、内を差せるかどうかは判断がつかない。差せそうではあるが、後ろから見ればまた違うのかもしれない。

ともかく、内を差せないのならば外に出るしかない。だがタマモクロスはまったく動こうとしない。

高松も混乱していたが、当の本人であるタマモクロスも混乱の極致にあつた。

内に隙間が出来たのはタマモクロスも気づいた。そこに飛び込むべきだと判断し、脚の向きを変えて飛び込んだ。

飛び込んだつもりだった。しかし現実には、体勢も脚の向きも一向に変化していない。

すでに隙間は埋まっていた。

ならば外に——そう思っても、またしても脚は思い通りに動いてくれない。

精神と肉体が乖離していることに気づいていない。

精神と肉体が恐怖に縛られていることに気づいていない。

身の竦むような心情でありながらも、その場で立ち止まらなかつたのは、わずかに残されたウマ娘の本能であろう。

小さな箱に閉じ込められたような猛烈な閉塞感。心肺を鷲掴みにされたような息苦

しさ。

自分の状態がまるで理解できない。だがこれが破滅的な状況だというのは理解でき
た。

このどうしようもない状況に直面して、タマモクロスは涙を流した。

視界が闇色に染まっていく。

それが絶望の色だと知るのに時間はかからなかった。

そして彼女は絶叫した。

第09話 絶望の沼

「どうしようもない愚か者だ！ 俺は！」

握りしめた拳から血が流れることにも構わず、高松は呪詛を吐くように続けた。

「認めないだけで改善するとも思ったのか！ すぐに治療するべきだった！ ルドルフ会長に土下座をしてでも助けを乞うべきだった！ 無能の極みだ！」

必要なのは心理カウンセラーか精神科医か。ともかく高松の手に余ることは確かだった。

喉の渴きを覚えて、テーブルのペットボトルをひったくるように手元に寄せる。

「クソツッ!!」

空になったペットボトルが、握力に負けてベコリと音を立てる。

とそこで、ポケットのスマホが着信を告げる音を奏で始めた。相手はつい先ほど口にしたウマ娘だった。

自分を落ち着けるようにゆっくりと深呼吸をして、通話状態にする。

「ちょうど、貴女に連絡しようと思っていたところですよ」

そこで言葉を区切った。これから口にする言葉は、交渉でも取引でもなく、ただの懇

願だ。

「……助けて下さい」

高松は恥も外聞もなくそう言った。

道が開いた。

彼と、高松とトレーナー契約を結んだ時、タマモクロスは確かにそう思った。

考え抜かれた練習メニュー、レース理論、肉体のケア。なるほど、これはみんながトレーナーを欲しがるわけだと切に感じた。

自分は速くなっている。自分は強くなっている。

模擬レースの結果がそれを物語っていた。

お盆に帰省した時に良い報告が来ると心が躍った。

だが実際に帰省してみると、予想だにしないことが起こっていた。体調を崩した母が入院していたのだ。

問題はそれだけではなかった。

母の勤め先の社長が申し訳なさそうに、返済について話したいと言ってきた。

『デビューはいつになるのか？』

『賞金が振り込まれるのはレースが終わってすぐなのか?』

『できれば年内にまとまった額がほしい』

何のことはない。トレセン学園入学時に母が用意した大金は借金だっただけの話だ。聞くとところによると経営がなかなか厳しいようだった。

それを踏まえてタマモクロスが出来ることは、一刻も早くデビューして賞金を得ることしかなかった。

無理を言ってデビューを早めて貰った。そして勝った。もう一度勝った。目標金額には達した。しかし今後のためにももう少し稼いでおきたい。

G I レースに出ることにした。その前にレースをひとつ走り、差しの練習をするらしい。タマモクロスは気持ちよく応じた。

そこで転倒事故に巻き込まれた。

誰が悪いわけでもない。そのウマ娘とて、望んで転倒したわけでも、望んで巻き込まれただけでもなからう。

怪我也大したことはなかった。謝罪も受け入れた。それで終わったはずだった。だがそれは悪夢の始まりだった。

前走でアクシデントはあったが、G I レースに出ることに変更はなかった。皐月賞を見据えて、ホープフルステークスに臨む。

スタートは上手くいった。中団前目の好位を狙えるだろう。だがタマモクロスのお思惑とは別に、脚はどんどん前に行く。

後ろから聞こえてくる怒号のような足音に急かされるように。気がつけば前には誰もいなかった。

先頭まで来ても脚は緩まない。後ろから迫ってくる気配が否応なしに不安の影を落とす。

スタートからスパートをかけていたような走りが最後までもつわけがない。背後から迫る暗影を拒絶するように、目をきつく閉じ、耳をペタリと塞ぎ、口を一文字に噤んだ。

気がつけばレースは終わっていた。

ただ調子が悪かっただけ。タマモクロスはそう思っていた。だがその見込みは甘いものだった。

次のレースで、彼女はようやく理解した。

自分は恐れている。転倒することを。巻き込まれることを。バ群に飛び込むことを。

恐怖症とは特定の対象や状況に対し過剰な恐怖心を抱いている状態をさす。

治療には薬物療法と心理療法があるが、基本的には心理療法の行動療法（暴露療法）となる。

例えば高所恐怖症では、2階の窓から外を眺める。それを克服したら3階から、続けて4階からと、程度の低いものから順番に慣らしていくといった具合だ。

バ群恐怖症の場合は、まずは2人の間に突っ込むことだが、これには問題がある。

タマモクロスは併走や模擬レースは普通に行えるのだ。レースという特殊な空間でのみバ群恐怖症は発症する。それが治療を面倒にしていた。

そう都合良く少人数のレースなどないし、あつたとしても治療に都合の良い状況になる保証はない。

また恐怖症にかぎらず、病気と向き合うことは必要である。

今まさにタマモクロスは自分の病気と向き合っていた。

脳内に設置された円卓には5人のミニタマモクロスが会議を繰り広げている。

「ここらどうにもならん。引退や引退。引退して地元のネジ工場に就職しよ」

気弱なタマモAが言う。

「無茶でもなんでも突っ込めば分かる。なんでも試してみるもんや」

強気なタマモBが言う。

「それができんから議論しとんやろ。はき違えるなや」

中立なタママCが言う。

「バ群が苦手ならバ群に入らなければええやんか」

利発なタママDが言う。

「やっぱそれしかないか」

議長のタママクロスはそう結論付けた。

要するに大逃げか追い込み一気で大外から捲るといふことだ。現実的なのは後者だろう。

タママクロスは瞳を開いた。

タママクロスのバ群恐怖症は日常生活に支障をきたすようなものではなかった。普通に授業を受け、普通に食堂で食事をし、普通にトレーニングをして、普通に模擬レースもやれる。

厄介なものを抱えてしまったが、タママクロスもクラシックロードを進むと決意した者である。

それに、どうせ試すのなら大舞台の方がいい。

「……本気か？」

「本気や。弥生賞に出る」

タマモクロスが皐月賞に出走するには賞金額が足りないため、優先出走権を得る必要がある。そのトライアルレースに選んだのは弥生賞だった。

弥生賞は3つあるトライアルレースで最も人気のあるレースだが、今年は少し事情が違っていた。

デビュー前から評判の高かったプロツサムスターが出走するのだ。

プロツサムスターはデビューから2戦を快勝しており、ホープフルステークスでも優勝候補とされていたが、骨膜炎に罹り回避していた。

つまり有力ウマ娘の中で唯一、中山の芝2000mを経験していない。

よって彼女との対決を避けるため、多くのウマ娘は他2つのレースを選ぶだろう。理由は勝率を上げるためだったり、手の内を隠すためだったりと様々だろうが、出走人数が少なめになるのは予想できた。

段階的な治療が実質的に不可能な以上、やむを得ない処置であった。それがまさかGIIレースとは思わなかったが。

そして来たる弥生賞。高松の予想通り、出走人数は9人と例年よりもやや少ない人数だった。

作戦は前走と同じく追い込み。タマモクロスは最後方からレースをスタートした。

レースはやや遅いペースで進んでいった。これは逃げや先行するウマ娘たちが余力を残す展開であり、後方で構えるウマ娘たちにとつては美味しくない展開である。

特に、徐々に位置を押し上げるといふのが不可能なタマモクロスは、どんなに前が遅くとも、かわして前に出るといふ選択肢がない。

ゴール前で観戦していた高松は激しい焦燥に焼かれていた。

第3コーナーを回つても、タマモクロスの位置に変更はない。もうすぐ第4コーナーが終わり、最後の直線に入る。

(判断が遅いッ！)

高松は無意識に腿ももを叩いた。

内か外かは状況次第と言つたが、タマモクロスは内に突つ込むつもりはさらさらなく、大外一気という弱い考えに支配されていた。

さらに思考が実行に移されるまでに、わずかなタイムラグがあつた。それに加えて、必要以上にバ群を恐れたのか、タマモクロスは観客のほとんど目の前と言つていいほどの大外にまで膨らんでいた。

(1着は厳しい。3着も……どうだ?)

中山の直線は短い。坂があるといつても、条件はみんな同じだ。タマモクロスにだけ有利に働くというわけではない。

高松にできることは祈ることしかない。

その祈りがとどいたわけではないだろうが、タマモクロスはギリギリで3着に入線した。

第10話 絶望の底

弥生賞3着。優先出走権の獲得という最低目標は果たした。

だが、事態は何も改善されていない。

末脚頼みの結果だ。だがこれも警戒されることになった。

(結局バ群には入れず、不自然なくらい大外に出てしまった。勘のいいトレーナーなら気づくだろう)

——タマモクロスはバ群に入れないのでは？

そうなれば外側を抑えられる。その場合は一度後退してから外に出るといふ、2度の手間を挟まなければならない。

それで勝てるほど皐月賞は甘くない。

(そもそも中山レース場が追い込みには不利なんだ)

中山の直線が短いというのは周知の事実である。追い込みで皐月賞を勝ったウマ娘もいるが、最後方から一気に先頭へ行ったわけではない。最後の直線の突入時点では、中団辺りに位置していた。

なにより、いずれ後方強襲の作戦が通用しなくなるのは歴史が証明している。

担当医の治療方法に文句をつけるつもりはないが、どうしようもなく不安になってしまふ。

段階的処置は取れないが、怪我もしていないのにレースに出さないわけにもいかない。

けつきよく高松が出来ることといえば、適度なメンタルケアを行いつつトレーニングで地力を底上げすることしかなかった。

そんな不安要素と不確定要素を抱えながら、皐月賞当日を迎えた。

中山レース場の控え室。出走時刻までは2時間ほどある。

タマモクロスは表面上は非常に落ち着いているように見える。恐怖症というのはそうしたものだ。それに直面しなければ、なんの不都合も発生しない。

作戦は後方からの大外一気。それしかないし、それでダメならどうしようもない。単純な作戦だった。

「タマモ、少し外す」

「ん」

ポケットのスマホが震えるのを感じて、高松は控え室を出る。相手は知らない番号

だった。

「はい。……ええ。タマモクロスはレース前ですから。ああ、それで私の方に。……は？ いえ、すいません。……はい。すぐに向かわせます。……はい。お願いします。では失礼します」

唐突なことに思考が上手く働かない。いや、今は考える時間が惜しい。一刻も早く動くべきだ。

そう考え、高松は控え室に戻る。

タマモクロスは瞑想しているようだった。それにも構わず、高松は端的に告げた。

「タマモ、いま病院から連絡があった。キミのお母さんが危篤状態だそうだ。すぐに出る。準備してくれ」

タマモクロスはカッと目を見開き、信じられないものを目撃したように高松を睨みつけた。

「もうすぐレースや」

「それは母親よりも優先すべきことか？」

「……いや、そう、やな。何を、言うとするんや、ウチは」

タマモクロスは予想もなかった事態に気が動転し、正常な判断力を失っていた。高松は彼女の私物をまとめてバッグに詰めると、タマモクロスに向き直る。

「正面……はマズいか。裏口で待つててくれ。出走取消の手続きをして、車を回す」
そう言い残して控え室を出る。

そもそも高松は彼女の母親が入院していることすら知らなかった。にもかかわらず連絡が来たのは、タマモクロスが緊急連絡先に高松の番号を記入していたからだろう。

車のキーを探しながら駆ける。と、高松はこのレース場にあのウマ娘が来ていることを思い出した。

（多分、アレで行くのが一番早い。ダメで元々だ。ひとつ頼んでみるか）

高松は関係者たちが集う上階に向かった。

その一方で、タマモクロスは茫然としていた。それでも裏口へ向かうということだけは理解したのか、覚束ない足取りで歩き出す。

胸に手を当てて動悸を押しししずめる。幾度も倒れそうになりながら、ようやく目的地にたどり着く。

車が来るのとはほぼ同時だった。

赤く平べったい車がタマモクロスの前に停まる。

「乗れ。そこに銀色の四角いボタンがあるだろう？ それを押すだけだ。上に開くから気をつけろよ」

指示に従い、銀色のボタンを押す。開いたドアは翼を広げたようだった。

「サイドシルそこに腰かけて、尻ケツから滑り込むように乗るんだ」

タマモクロスが席に収まったのを確認すると、高松は視線を前に戻した。

独特エキーストノートの咆哮エキーストノートを奏でながら、真紅のランボルギーニ・カウンタックは風を切って走り出した。

第11話 愛の在処

医師の尽力もあつて、タマモクロス之母はとりあえずの危機は脱した。とりあえずである。最悪には至らなかつたというだけで、病状が快復したわけではない。

今も彼女はベッドの上で眠り続けている。

5分後に目覚めるかもしれないし、このままずっと目覚めないかもしれない。そういう状態だった。

タマモクロスは学園に相談し、短期の休学手続きを行った。

高松は週末にタマモクロスの元を訪れ、状態を確認した後に一週間分のトレーニングメニューを渡した。

身体を動かしていた方が余計な事を考えずに済むという配慮も含まれていた。

”競走”ウマ娘という種族は走らなければ退化する。タマモクロスはまだ競走ウマ娘だった。

夏休みに入った。

病状に変化はない。それとは逆に、タマモクロスの身体は引き締まってきたように見えた。身体を動かしていないと不安なのかもしれない。

以前のような明るさはなかった。

夏休みが終わった。

病状に変化はない。タマモクロスは少しやつれているように見えた。瞳の輝きが鈍い。あまり眠れていないのかもしれない。

高松は自分が無力であることを痛感した。

さらに2カ月ほどが経った。

タマモクロスの母は昏睡から覚めることなく息を引き取った。

奇跡は、おきなかった。

秋風の吹く10月下旬の訃報だった。

墓前にはメロンが供えられていた。

その前で立ち尽くすタマモクロスを、高松はただ黙って見つめていた。

高松が彼女と会話したのは、たったの一度だけだった。入院していることも知らなかった。

タマモクロスは喪服ではなく、勝負服を着ていた。セーラー服を元にデザインされたような、濃紺を基調とした服。

それを着て墓前に立つことが、彼女なりの決意だったのだろう。

いま彼女を支えているのは妹たちの存在だった。自分が哀しみに倒れてしまえば、妹たちは不安に押し潰される。

死者は蘇らない。生きている者たちだけで、前へ進むしかない。自分が妹たちの導しるべにならなければいけない。

姉としての矜持が、折れそうになる心を支えていた。

母への報告が終わったのか、タマモクロスはゆつくりとこちらに歩いてきた。目が赤い。それを隠す様子もない。

「レースの手配、頼みます。条件は何でもええけど、場所は阪神で」
「わかった」

吹っ切れたようにそれだけを告げて、タマモクロスは振り返りもせず歩き出した。

いま自分がすべきことは、母の遺骨に縫って泣き叫ぶことではない。哀しみも切なさも、すべて墓前こぼに置いていく。

深い傷を負う覚悟で前へ進まなければならぬ。戦うとはそういうことだ。誇りある生き方をしたいのならば。

あがいてもがいて、泥にまみれて傷を負って、それでも前へ進む。
タマモクロスは覚悟を決めたのだ。

高松が選んだレースは11月2周目の条件戦だった。芝2200mと、この日のメイ
ンレースであるエリザベス女王杯と同じ条件である。

タマモクロスは16人中16番人気だった。

皐月賞を直前で出走取消、約8カ月ぶりのレース。やはり葦毛のウマ娘は走らないの
かという風潮が広がっていた。

戦場ターフへと続く地下バ道を歩く。天井の高さ、道の幅、いつもなら気にもしないことに、
引掛かりを覚える。神経が過敏になっていられるのかもしれない。

作戦について、高松は何も言わなかった。好きにやれということだろう。

光を感じて、地下バ道を抜けたのだと知る。ずいぶんと観客が多い。もちろんこの
レースが目的ではないだろうが。

ゴール前の関係者ゾーンに目を向ける。高松がいた。妹たちと一緒に。

それだけを確認して、タマモクロスはパドックを終え、ゲートへ向かった。

ゲートが開く。完全に開ききったのを確認して、タマモクロスは一步踏み出した。急
ぐ必要はない。焦る必要も。

定位置となった最後方でメインスタンド前を駆け抜けていく。不安そうにこちらを

見ている妹たちが目に入った。高松が心配ないと説明しているようだった。

レースは速いペースで進んでいるようだ。第1コーナーから先頭のウマ娘が見える。かかつてはいないように見えた。

第2コーナーを抜け、向こう正面に入る。

15人のウマ娘たちの背中が見える。何故こんなものを恐れていたのだろうか疑問を持った。

本能的に闇を恐れるようなもの、それが過剰に反応しているものだと言明された。

競走ウマ娘としては死んだも同然だった。

なら今の自分は、生き返ったのだろうか。命を貰ったのだろうか。

第3コーナーに入る。そろそろ仕掛けどころを考えなければならぬ。

最後の直線は356・5メートルとやや短い。ゴール前に急坂があるが、それは大した問題ではない。そんなものは、中山で十分経験している。

第4コーナーを抜けて直線に入る。勝利へのルートはもう視えていた。外に出る必要はない。

風の音を聞いた。

風の声を聞いた。

それは母の声だった。

最後の直線、高松の位置からでは前方のウマ娘たちが壁になって後方の様子が見えなかった。出てくるなら外だろうと気を配っている。だが内を差してくるのではないかという期待もあつた。

まだタマモクロス姿は見えないが、アナウンサーが興奮気味にタマモクロスの名前を叫んでいることに気がついた。

『前の4人が接戦だ。後続勢はまだやってこないか。おっと真ん中からゼッケン10番、えー、タマモクロスだ。タマモクロスが真ん中から突っ込んで来た。巧みな脚捌きで前をかわす。稲妻のようなステップだ！ 前との差が詰まる！ タマモクロスが飛んできた！ 前との差は5、6バ身あるが、凄い脚！ タマモクロス！ 3番手！ 2番手！ 前にとどくか！ とどくか！ とどいた！ とどいた！ 差し切り勝ち！ タマモクロス15人をごぼう抜き！ 優勝はタマモクロス！』

雲間から差し込む陽光に照らされて、約1年ぶりの勝利を手にしたタマモクロスは天を見上げていた。迷いが晴れたような笑顔を見せて。

(不甲斐ない娘でごめん。ウチはもう大丈夫や。大丈夫やから、安心して見といてや) その日、タマモクロスが叩き出したタイムは同日に開催されたエリザベス女王杯の優

勝タイムよりも速かった。

第12話 シニアの始まり

シンボリルドルフというウマ娘がいる。

無敗の三冠ウマ娘、七冠ウマ娘。ドリーム・シリーズで殿堂入りを果たした“最強”のウマ娘。

才覚に溢れ、それに溺れず、他の追隨を許さぬ決定的な強さを持ったウマ娘。その強さの秘密は何なのか。

高松は、漠然とだが、それは見切りの早さだと思った。

unnecessaryものを捨て、必要なものを得る。状況が変化すれば即座に対応する。固執しない、縋らない。

例えるなら“損切り”だ。まだ回復するかもしれない。そんな期待をしない。そんな幻想を見ない。

彼女は常に、現実と事実だけを見る。

ことレースに関して、シンボリルドルフは常に即断即決を良しとしてきた。

シニアクラスになって、それは完全に開花した。早熟型だと思われていた彼女は、実は晩成型だった。

肉体は円熟し、思考は老成した。”最強のウマ娘は、無敵のウマ娘となった。

(タマモはその領域に足を踏み入れたのかもしれない)

無論それは思考力や判断力、意志力といった内面的なもので、肉体的にタマモクロスより優れたウマ娘はごまんといる。

それでも確かに言えることは、タマモクロスがひとつ上の段階マスターに昇ったということだった。

12月、同じく阪神レース場で開催されたチャレンジカップでも、タマモクロスはその強さを見せつけた。大外から一気に捲って、6バ身差の圧勝。初の重賞制覇となった。

このレースをもって、タマモクロスのクラシッククラスは幕を閉じた。

そして、今年最後の日曜日。高松とタマモクロスは部室で早めの年越しそばを啜りながら、有《font:ul40》馬《font》記念を観戦していた。

多少の波乱を含んだレース展開だったが、最後はメジロの令嬢が優勝を飾った。

「同期の桜には期待しとったんやけど、あないなことになるとはなあ。大丈夫やろか」

「レースに絶対はないってことだな。ダイナムヒロインも惜しかったが、最後にメジロ

の底力を見せたな」

「ま、同期の仇は来年ウチがとつたるわ」

死んだみたいに言うなよ、と思つたが、高松は黙つてそばを啜つた。ふたりがそばを啜る音だけが響き、汁まで飲み干したタマモクロスが手を合わせて立ち上がった。

「ごつそさん。んじやトレーナー、また来年な。ちゅーか1週間後やけど」

「ああ、急かして悪いな」

「かまへんよ。年の初めに勝つと縁起がいいつてのは分かるしな」

「一応言つておくが、食べ過ぎには注意しろよ」

「心配せんでも正月太りなんかせえへんつて。ほなな」

タマモクロスは笑みを浮かべて部屋を出て行つた。

松の内も明けぬ内に開催される中山金杯。中山レース場で行われる最初の重賞レースである。

タマモクロスは堂々の1番人気。スタンドには「浪速の白い稲妻」と書かれた横断幕が確認できた。どこかのスポーツ紙が書いた白い稲妻というのが、思いのほか定着しているらしい。

タマモクロスにとっては、あまり良い思い出のない中山レース場の芝2000メートル。とはいえ、避けて通ることのできないレース場でもある。

特徴はやはり坂を2回越えることだろう。スタート直後に坂があるため、先行策を取るウマ娘は、坂を上りながらポジション争いをしなければならなかったためスタミナを大きく削られる。

まあ、後方に行くタマモクロスにとっては関係のないことではあったが。

第2コーナーを回って向こう正面へ。タマモクロスは当たり前のように最後方にいた。第3コーナーから第4コーナーへ。

(はぁん。随分と警戒されとるな)

1番人気だけあって、上手く外側を抑えられている。ここで一度下がると致命的な口スになりにかねない。

(ま、そんな必要はあれへんけど。こういうとき小^ちつさい身体は有利やわ)

スタミナが尽きて垂れてきたウマ娘たちを捌き、わずかに空いた内側に身体を滑り込ませる。あとはもう手慣れた作業だ。内側から一気に差し、タマモクロスは重賞2連勝を飾った。

大寒の頃、寒さは極まりつつある。体調を崩しやすく、また怪我もしやすい季節である。いつも以上に安全や体調管理に注意する必要がある。

トラックコースも常よりは閑散としている。トレーニングルームや温水プールなどを使用しているのだろう。

だが当然定員があり、全員が利用できるわけではない。そういった施設は基本予約制だ。

整理運動を行いながら、今後のスケジュールを確認する。

「阪神大賞典、大阪杯、天皇賞（春）、宝塚記念。ちよつと信じられんスケジュールだな」
高松が以前に担当した2人は短距離くマイル、マイルく中距離メインだったため、春の天皇賞に出走することはなかった。

逆にタマモクロスは、マイルでは物足りないくらいで、その本質はステイヤーにある。「ウチかてそうやわ。でもま、いつこずつ確実に勝つていくで。阪神地元で負けるわけにはいかへんからな」

「そうだな。特に大阪杯は今までで一番の激闘になるだろう」

同期からはダービーウマ娘のメリービュートイー、クラシックの冠は逃したものの、すべてのレースで好走したゴールドシチー。

先輩勢からも、ロングリブフリーやダイナムヒロインなどの有力ウマ娘が出走を表明

している。

「メジロのお嬢様は出てくるかな？ 阪神大賞典には出てくるだろうが……どうした？」

タマモクロスは整理運動の手を止めて、正門の方を見つめている。高松がそちらに目を向けると、4人の人影が見えた。

うち二人は知っている。緑色のスーツ姿の女性は、このトレセン学園の理事長秘書。もう一人の杖を突いている老人は、人生の半分以上をウマ娘とともに歩んできたベテラントレーナー。

あとの二人、茸毛と栗毛のウマ娘は見覚えのない顔だった。

「茸毛……？ ああ、そういえば。生徒会長みずからがスカウトしたウマ娘が、地方から中央こっちに来ると聞いたな。気になるのか？」

「いや、どうやるな。でもなんとなくやけど、あいつとは一緒に走ることになる気がするわ」

「ほう、それは楽しみだな」

タマモクロスが走るといふことは、間違いなく重賞レース。そこで茸毛のウマ娘が競い合う。それはとても興奮する光景だろうと高松は思った。

「何ちゆう名前か、知つとる？」

「ああ、確か——」

記憶の引き出しを探り、高松はその名前を口にしました。

第13話 大阪杯

大阪杯。阪神レース場で開催される、芝2000のレース。春のシニア三冠の入り口となるレースである。

高松は控え室のドアをノックし、了解を得て扉を開けた。

「うん。似合ってるじゃないか」

タマモクロスの新しい勝負服姿を見て、高松は相好を崩した。

胸に白い稲妻のマークがついた青いタンクトップに、長い脚を強調するような白いパンツ。青基調のジャケットの両袖には「疾風」と「迅雷」の文字が描かれている

「まあ、悪うないわ。服で速^{はや}くなるわけでもないけどな」

そう言いつつも尻尾はぶんぶんと勢いよく揺れていた。

「ふっ、それで作戦だが、やはり後ろに構えた方が良さそうだな」

「せやな。ウチもそう思うわ」

今回のレースは先行を得意とするウマ娘が多い。前方のポジション争いは熾烈なものになるだろう。そこでスタミナを削られるのは避けたい。

「要するにいつも通りってことや。前で削り合ってくれるなら好都合や」

「だが今回は面子が面子だ。最後方で悠長にしているわけにはいかないぞ。仕掛けどころを間違えなよ」

「分かつとるて。妹たちの前で負けるわけにはいかへんからな」

前走、阪神大賞典もここ阪神レース場で行われた。長距離に不安はなかったが、実際に走らせてみて確信した。やはりタマモクロスの本領は長距離にある。

ここ阪神は彼女のファンも多く、妹たちも気軽に招待できる。それが彼女の一助となっていた。

「ああ。ゴール前であの子たちと一緒に見ているからな」

「おう、んじや行つてくるわ」

タマモクロスは自信満々でターフに向かって歩き出した。

ゲート前に集う16人のウマ娘。皆がそれぞれの方法で集中している。1番人気のタマモクロスはやはり注目されていた。いや、警戒されているというべきか。

同期たちと言葉を交わし、先輩たちから声をかけられる。

ファンファーレが鳴り響き、各自ゲートに収まっていく。スタート直前の独特の静寂がレース場を包み、春シニア三冠の始まりを告げる音が響いた。

『——スタートしました。飛び出したのは4番ウラカマイヒメ。公言通り逃げの一手。それを追って行ったのは2番人気のダブルティアラ、マツクスクイーン。1番人気のタマモクロスはいつもの位置。最後方からレースを進めます』

メインスタンド前の坂を駆け抜けて、第1コーナーへ突入する。タマモクロスの狙い通り、先行のポジション争いは熾烈なものとなっていた。

第2コーナーを回って向こう正面へ。ポジション争いも決着し、隊列は落ち着いた。

先頭に行くのはウラカマイヒメ。その2バ身後ろに、究極の美女とも称されるマツクスクイーン。むろん美しいだけではない。桜花賞とオークスを制した実力派のウマ娘。

さらに少し下がって先行集団。その中で、比較的良いポジションを獲得したのは、昨年のダービーウマ娘、メリービューティー。

その彼女は——

(悪くない展開。いやこれは良い、良いですよ。ナイスな展開じゃないか! いけますよ、これわあ!)

最高かかにハイかりになっていた。

その後ろには差しに構えるウマ娘たち。ロングリブフリー、ダイナムヒロイン、そしてゴールドシチーはここにいた。100年に一人の美少女ウマ娘。

(前にビューティー、後ろにタマモ、この展開は予想通り。ペースもそこまで速くない。

やっぱり最後は末脚勝負になる)

冷静に状況を分析し、好位から仕掛ける算段を立てる。

そして最後方にはタマモクロス。

(やっぱGIに出てくるやつらはレベルが違うわ。末脚自慢のやつらがぎょうさんいてるからな。いつまでも最後方こんなとこにいてられへん。徐々に押し上げんと)

『向こう正面、タマモクロスがじわりじわりと上がってきています。現在後方から3番手』

(タマモが上がってきた。アタシもうかうかしてられないわ)

同じ位置からヨードンとなれば、いくら末脚に自信のあるゴールドシチーでも分が悪い。タマモクロスよりも前でスパートする。脚は余らせない。これが勝つための最低条件。

(ムムム、この独特の足音リズムは……シチーが来た？ ちよつと焦り気味じゃない？ ふ

ふつ、これじゃあダービーの二の舞だねえ。まだよ、まだまだ。今はまだ脚を溜めるとき……)

最高かかりぎみにハイのダービーウマ娘は冷静で的確な判断を下した。

『タマモクロスが外から来る。ゴールドシチーも動き出した。その前にメリービュティーがいる。世代の人気3人が固まつてる。第3コーナーから第4コーナーの中間

点。先頭はウラカマイヒメ。その内にマックスクイーン。その外からゴールドシチー。タマモクロスは1番外に出て直線コースに入る』

(阪神内回りの直線はそない長ない。けどこの差ならイケる。あとは駆け抜けるだけや！)

『さあ最後の直線だ。ウラカマイヒメ粘れるか。マックスクイーンが猛追。外からゴールドシチーとタマモクロス。内をすくつてメリービュートイー。ダイナムヒロインも突っ込んで来た』

最後の直線。レース最大の見せ場であり、熱気が最高潮に達するところ。すべてのウマ娘たちが己の脚に活を入れ、阪神の坂へ挑む。

『マックスクイーンがウラカマイヒメをかわす。現在先頭。しかし外からタマモクロス。タマモクロスが一気に来た。並ばない！ 並ばない！ 見てくれこの脚！ これがタマモクロスだ！ これが白い稲妻だ！ タマモクロスが1着でゴールイン！ 2着は混戦だ！ マックスクイーン、ゴールドシチー、ダイナムヒロインがもつれるように入ります！』

「勝った勝った！ タマ姉えまた勝ったよ！」

「あんまり騒がないの。タマ姉えが負けるわけないじゃない」

下の妹が無邪気に騒ぎ立て、それを上の妹が諫めている。しかし尻尾をぶんぶん振りながら諫めても説得力がなかった。

（ダブルティアラ相手でも問題なく勝てたか。本当に強くなった。しかしあのアナウンサー、地元だからといってタマモを鼻負しすぎじゃないか？あとで怒られないといいけどな）

アナウンサーはすべてのウマ娘に平等でなければならぬ。だが熱が入りすぎて主観を口にしてしまうアナウンサーもいる。

そんなどうでもいいことを考えながら、高松は妹たちを連れてライブ会場へと向かった。

第14話 天皇賞（春）

天皇賞を語る上で外せないのは、やはりメジロ家についてだろう。かの大家はクラシック三冠よりも、グランプリレースよりも、ジャパンカップよりも、天皇賞に熱意を燃やしている。

それはもはや執念と言ってもいい。とはいえ、別に裏工作などを仕掛けてくるわけではない。

正面から堂々と、メジロの威信をかけてレースに臨む。その姿勢に多くのファンは心を打たれ、天皇賞だけはメジロファンになるという者も多い。

「というわけで、メジロデュレンには要注意だ。阪神大賞典で勝ったからといって甘く見るなよ。むしろ負けたからこそ、マークはキツくなるぞ」

「それももう慣れてきたけどな」

タマモクロスは苦笑して両の手の平を天に向けた。タマモクロスは現在重賞4勝を含む5連勝中である。警戒されるのも当然だろう。

長距離になればいつもとは面子が変わる。だが変わらない者たちもいた。

「おうおう、またウチの尻ケツを拝みに来たんか？ 今日もしつくり眺めていきや」

「くつ、今日こそは勝つわ。ダービーウマ娘の意地にかけて！」

「言つとくけどアタシ、長距離も得意だから」

（そういえばゴールドシチーは菊花賞で2着だったな。場所も同じだし、自信があるのか）

プリプリと怒りながら離れていくメリービューティーを見送りながら、タマモクロスはぼそりと「冗談の通じんやつちやな」とつぶやいた。

（頑張れよタマモ。ここはキミの真価が問われる場所だ）

俗に、菊花賞は強いウマ娘が勝つと言われている。スタミナはもちろん、3コーナーから4コーナーにかけて設けられた心臓破りの丘を突破するパワー、言わずもがなスピードも要求される。最後の直線を競り勝つ根性や、レース展開を読み切る賢さも必要となる。

春の天皇賞は、菊花賞よりもさらに200m長い。つまり春の天皇賞は、真に強いウマ娘が勝つレースなのだ。

大観衆に見守られ、春の天皇賞がついに、スタートした。

『18人、綺麗に出揃いました。1周目第3コーナーへ向けて駆けて行きます。先頭ハナを取つたのはセイシヨウカイエン。その外からリカードクーガー。この2人が並んで飛び出しました』

京都レース場の芝3200mのコースは、年に1度、春の天皇賞でしか使用されない。権威あるレースであり、当然芝の手入れは万全である。それに加えてウマ娘たちの意気も高く、冷静さを失えば意図せずしてスピードが出てしまう。結果スタミナを消費する。

最後まで沈着冷静でいられるか。それがレースの肝になる。

（かつての有《font:ul40》馬《font》記念で有力ウマ娘2人がマッチレースをするように先頭を競い合った。互いに闘志が刺激され、他のウマ娘を寄せ付けず、最後まで優勝を争った。それがあの2人にできるのか。有《font:ul40》馬《font》記念よりさらに長い、この天皇賞で）

長距離を逃げ勝つというのは、尋常の業わざではない。逃げというのは経済コースを走れるという利はあるが、風をまともに受けるといふ不利もある。

そして何よりの特権は、ペースを作れるということだ。速いペースか、遅いペースか。彼女たちが選ぶのはどちらか。

レースは第4コーナーを回ってメインスタンド前へ。観衆の声と拍手が18人のウマ娘を出迎える。

逃げる2人から少し離れて、16人はほぼ一団となっていた。中団前目にゴールドシチー、中場にメリービューティーとメジロデュレン、後方にタマモクロス。

『先行集団から1人抜けけだしました。先頭は交代してマヤマオリンポス。第1コーナーから第2コーナーの中間点。タマモクロスも少しずつ動き出しました』

ここで最初の駆け引きがあった。前を行く2人は遅いペースを作ろうとした。競い合つてとぼしていると後方に勘違いさせスタミナを温存していた。だがマヤマオリンポスは即座に見破り、それを喰い破つた。リカードクワガーは破綻した策に固執せず、先行集団まで脚を下げた。

『第2コーナーから向こう正面に入りました』

先頭の2人を除いて、ほぼ一団となってレースは進んでいく。だがその中では激しいポジション争いが行われていた。タマモクロスはすでに中団前目の5、6番手まで位置を押し上げている。それを受けてメジロデュレンも動き出す。タマモクロスの前を抑えるようにスピードを上げた。

攻防は第3コーナーへ移る。本日2度目の、心臓破りの丘へ。

『さあこれから第3コーナーの上りに入ります。後方集団も差を詰めて来ました。メリービュウティは後方から5番目辺りか。下りにかかつて第4コーナーへ。先頭はロングリブフリー、メジロデュレンが並んでいます。外にゴールドシチー、タマモクロスが内を狙っています』

京都レース場の特徴は、まず心臓破りの丘、次に最終直線のイン突きにある。外回り

のコースにおいて、最終コーナーを遠心力で外に振られたウマ娘たちの内側を突いて優位を得る。

もちろんそんなことはみんな知っている。だが知っていることと実践できることはイコールではない。

体力は限界近く、遠心力に逆らうための踏ん張る力も残っていない。筋疲労も脳疲労も極限に達している。

しかしメジロデュレンは内を絞めた。叩き込まれた天皇賞の勝ち方を遂行した。その激みなく洗練された動きは称賛に値する。

まさに天皇賞を勝つための必殺のプラン。

だがその堅牢なる扉の門がかけられる間際、白い稲妻が扉を襲った。

『内から来た来たタマモクロス！ 6連勝へ向けてタマモクロスが先頭へ立ったああー！』

肩がぶつかり合う。体格差をもものともせず、タマモクロスはメジロデュレンの門を弾き返した。

『さあ最後の直線！ タマモクロス速い！！ タマモクロス1着！！ 天皇賞（春）を制したのはタマモクロス！！』

（強い！ やはりタマモの本領は長距離にある！）

高松は拳を握った。と同時に落胆もする。現在トウインクルシリーズでは長距離レースの数が少ない。それはつまり活躍の場が少ないということである。

（しかし、今はこの歓喜を噛みしめよう）

春シニア三冠まであとひとつ。残るはグランプリ、宝塚記念。

第15話 宝塚記念

宝塚記念。年の前半を締めくくるグランプリレース。春シニア三冠の最終戦。

「やはり最も注意すべきなのは、アキツテイオーだな」

マイルの帝王という二つ名を持つマイラー。大阪杯で対決するかとも思ったが、彼女が選んだのは大阪杯の翌週に開催されたGⅡ阪神ステークスだった。そして前走の安田記念でも優勝している。

「前年の宝塚記念でも2着に入っている。要注意だ」

世間が注目しているのはそこだ。2200mという距離は、アキツテイオーにとって少し長く、タマモクロスにとっては少し短い。とはいえ、タマモクロスは中距離が苦手というわけではない。むしろ過去のレースでは中距離で何度も優勝している。それが、マイルの帝王相手に通じるのか。結局はそこに集約される。

最近は当然のように1番人気を取っていたが、今回はアキツテイオーに譲って、タマモクロスは2番人気だった。

アキツテイオーはただのマイラーではない。天皇賞(秋)も勝っているし、前年の宝塚記念を走ったという経験がある。

対してタマモクロスは、厳しい言い方をすれば勢いだけで来たというウマ娘だ。勢いだけで天皇賞（春）が勝てるか？ という擁護もあるが、レース運びはまだ未熟で、未脚頼みのウマ娘と言う者もいる。

総合的な評価を下せば、安定感のあるマイルの帝王に分があると決着したのだろう。ファンというものは、レース前にそういった口論をするものだ。

「人氣が順位通りになるとは限らん。ウチが欲しいのは一番人氣やのうて一着や」

「そうだな。阪神の走り方について、今さら言うことはない。勝つてこい、タマモ」
「言われんでもな」

ゴツンと拳をぶつけ合い。タマモクロスはゲート前に向かった。

『さあ、各ウマ娘ゲートインが完了です』

スタート前の静寂。何度経験しても緊張の瞬間である。

『スタートしました。綺麗なスタート、まず飛び出したのはミスレディ。内の方は固まっています。アキツテイオーも中を突いて上がってきています。内を突いて出てきたのはメジロフルマー。メジロフルマーが先頭です』

先頭に立ったのはメジロフルマー。目黒記念、日経賞を優勝し、調子を上げてきている。

目黒記念ではメリービュートイーを抑えての優勝だ。

全員がほぼ一団となってメインスタンド前を駆け抜けていく。

『アキツテイオーが早々に位置を押し上げています、現在2番手。タマモクロスは後方から3番手でレースを進めます』

第1コーナーから第2コーナーのスパイラルカーブでアキツテイオーが仕掛ける。逃げるメジロフルマーの後ろまで駆け上がった。

(メジロフルマーを風除けにしてスタミナを温存するハラか)

タマモクロスが場を乱し、ドサマギで主導権を得るのだとすれば、アキツテイオーは周囲に意気を伝播させ、相手のレース勘を狂わせるといったところだろうか。

(気を抜いたら吞まれる。さすがは帝王や)

後から眺めているだけでも、その威圧をヒシヒシと感じる。前を走るメジロフルマーはたまったものではないだろう。タマモクロスは慎重に仕掛けどころを探っていた。

(勝負は下駄を履くまでわからへん。帝王には帝王ゆえの慢心がある。そこを、突く！)

『向こう正面の半分を過ぎました。先頭はメジロフルマー。それをマークするようにピツタリと2番手にアキツテイオー。タマモクロスが早くも上がってきた。第3コーナーへ入ります』

タマモクロスがアキツテイオーの背中を捉えた。その瞬間、アキツテイオーが動き出

す。第3コーナーから第4コーナーの中間点。メジロフルマーをかわして先頭に立つ。
(ちい、息つく暇もあらへん。追うしかない！)

『さあ第4コーナーを抜けます。外からメジロデュレン、ロングリブフリーも来た。塊となつて最後の直線に突入します。先頭はアキツテイオー。タマモクロスは現在5番手』

(捉えたでマイルの帝王！ 勝負はここからや！)

『先頭はアキツテイオー。内からはメジロフルマー頑張っている。タマモクロスが来た。タマモクロスが来た。しかし阪神はここから坂がある。上りきれるかタマモクロス！ 粘りを見せるかアキツテイオー！』

最後の直線、前には唯ひとり。まだ100mある。だが――

(脚が――重いッ！ なんや……なんでこんな……)

前走、天皇賞(春)では3200m走つてもまだ余裕があった。そのレースより1000mも短いというのに、もう限界が来た。

(坂か？ バ場か？ 疲労が完全には抜けてへんかった？ それとも、ウチが帝王の威にあてられとつたつちゆうんかいッ!?)

残り50メートル。1バ身が遠い。

——過剰な力^{りき}みは肉体に不和を生じさせる

そこで、タマモクロスは高松の言葉を思い出した。身体からほんのわずか、力を抜く。肘の角度、膝の角度、それが1度違えば、それはもう最適なフォームではない。

カチリ、と。何かハマる音がした。

反動を膝で吸収し、蹴り出す。意識するのは膝と蹴り足。疲れ切った身体が思い出したのは、徹底して叩き込まれた基本の動き。一番楽に走れる、一番無駄のない動き。

筋肉と関節と神経が理想の連動性を生み出し、タマモクロスの身体は稲妻となった。

『アキツテイオー粘れるか！ タマモクロスが出てきた！ タマモクロスだ！ タマモクロスが抜けた！ タマモクロスが先頭に立った！ タマモクロスが先頭でゴールイン。優勝はタマモクロス！ 怒涛の7連勝!! タマモクロスが春のシニア三冠を制覇しました!!』

勝利を確信した自分を抜き去った一陣の風。その葦毛の髪に、白い稲妻が帯電しているのを幻視した。

完璧なレース運びをしたはずだった。その上を行かれた。アキツテイオーは時代の風がうねりを上げて昇華するのを感じて瞳を閉じた。

第16話 大空に唄う

「お疲れ様」

「おう、あんがとさん」

ウイニングライブを終えて控え室に戻ってきたタマモクロスにタオルとドリンクを渡す。

はしやぎ疲れた妹たちはソファの上で寝息を立てている。

「どうだった？ マイルの帝王は」

「うん。さすがつてところやな。春天よりキツかったかもな。でもなんか……なんか掴めそうやったんや」

タマモクロスは曖昧気味に小さく頷いた。

「確かに最後の走りは、無駄がないというか、洗練されていたように見えたな」

「トレーナーから見てもそうか。後で見直してみるわ」

掴めそうなのかというものが、雲のようにはつきりしないものではあったが、自分がさらに成長するための、必要不可欠なものだという確信があった。

「ああ、それと。あいつ、見に来とったで」

「あいつ?」

「あいつやあいつ。カサマツから来たつちゆう……」

「ああ、カサマツの若き怪物か」

彼女の名前は、ダービーの一件で世間に広く知れ渡った。それを仕掛けたのはひとりの若い記者だったが、皇帝シンボルドルフも一枚噛んでいることが分かって余計に問題が大きくなった。

(クラシック登録を忘れるとは……)

普通ならあり得ないことだが、中央の事情に疎い地方の出身ならあり得るのかもしれない。

「確か3連勝……いや、4連勝だったな」

重賞レースを立て続けに4連勝。実力は地方レベルを遥かに超えている。

「予想以上に順調だな。ぶつかるとすれば——」

『天皇賞(秋)』

ふたりの声が重なり、笑い合う。

「これまでのレースから見て、彼女の得意距離はマイル〜中距離だ。キミとの対決を避けるなら、マイルチャンピオンシップという線もある。地方出身ならダートも走れるだろうから、チャンピオンズカップも視野に入るな」

「いや、あいつは来るわ。そういう目をしとった。なんちゆうか、あいつは特別なんや」
気にかけてのは自分と同じ葦毛だからか。あるいはもつと違う、運命的な何かを感じたのか。

高松には知る由もなかった。

G13連戦は肉体的にも精神的にも疲労が大きいと感じたのか、その後のトレーニングは抑え気味に行った。

「最近は大レースが続いたからな。ここらで一息いれるのも悪くない」

「そういうやもうすぐ夏休みやけど、予定はあるん？ 合宿は無理なんやろ？」

チームではない高松とタマモクロスは、合宿の抽選権すらない。だが高松はある計画を頭に描いていた。

「合宿は行くさ。個人で行く分には何の問題もない。せつかくだ。キミの妹たちも誘って行こう」

「そりやあいつらも喜ぶやろうけど、こつちの方は大丈夫なん？」

タマモクロスが親指と人差し指で円を作る。

「キミには随分と稼がせてもらったからな。むしろ使わせてくれ。それくらいしないと

申し訳ない」

「さよか。ならお言葉に甘えとくわ」

タマモクロスは簡単に了承した。彼女の妹たちとも相談し、合宿は夏休み初日に出発することになった。

場所は着いてからのお楽しみということで、妹たちは心を躍らせていた。

その日、つまりは出発の日、高松はタマモクロスに乗せてトレセン学園を出発した。関西で妹たちを拾い、進路はさらに西へ。

高速道路は子供たちにとって退屈だったが、海が見えた時点で機嫌が上向き、海上の吊り橋に入った瞬間に最高潮へ達した。

「四国へ行くんか」

「ああ、俺の故郷だ。海もあるし山もある」

「うみっ!? 泳げるっ!?」

「もちろん。ちゃんと水着は持ってきたね?」

「持ってきた!!」

後部座席で妹たちが興奮気味に応える。

「けど泳ぐのは明日。今日は神社にお参りだ」

「神社? まさか八十八カ所巡るんか?」

タマモクロスは訝しんだ。

「まさか。さすがにそんな時間はないし、子供たちも退屈だろう。聞いたことないか？

一生に一度はお参りしたい、伊勢神宮と金刀比羅宮ことひらぐう」

金刀比羅宮。地元では親しみを込めてこんぴらさんとも呼ばれている観光地である。山の中腹にある神社であり、軽い気持ちで行くと後悔することになる。それでも参拝者は全国から訪れる。

「お、賑わつとるな」

スタート地点となる表参道には土産店や軽食店が軒を連ねている。そこで名物の讃岐うどんを軽く啜って、一行は石段を登り始めた。

「あつ、見て見て。おっきなプロペラがある！」

妹たちが左側の広場にある巨大なプロペラを見上げて感嘆の声を漏らしている。

「この主祭神は海上守護の神さまだからな。造船会社が奉納したんだ」

「ほー海上守護か。ウチらにはあんまり関係なさそうやな」

「他にも金運や良縁、商売繁盛に健康運などがあるな」

「いや、欲張りセツトか！」

タマモクロスがビシイとツツコミを入れる。

さらに登っていくと、立派な造りの社が見えてきた。

「おつ、本宮が見えてきたで」

「あれは旭社だ。本宮じゃない」

「ほな参らんでええの？」

「本宮の後に参拝するのが正しい順序だ」

そう言つて、高松は回廊に沿つて北へと進んでいく。その先に手水舎が見えてきた。

「ここで手と口を濯いで邪念を払い落とす」

「いや、邪念で」

妹たちに正しい作法を教えながら、身を清める。

その先にある最後の石段を登り、ようやく御本宮に辿り着いた。

「結構な石段登つてきたな。何段くらいあつたん？」

「785段だ」

本来なら表参道から本宮までは786段の石段があるが、786なやむと語呂が悪いので、後から1段下げる石段を作り、785段にしたといわれている。

「さて、これからが本番なわけだが、タマモはお参りの作法は知っているか？」

「バカにせんといてや。鈴ならしてお賽銭いれて、二礼二拍手一礼やろ」

「正解だ。みんなお願いは決めたな。じゃあ、参ろうか」

それぞれが、自分の心の中で神さまに願いを伝える。

(タマモが怪我なく走れますように)

(秋シニア三冠、絶対取る！)

(タマ姉えが勝てますように)

(タマ姉えが日本一のウマ娘になれますように！)

「次はおみくじを引くか」

本宮からさらに登ったところに奥社があるが、子供の足では辛いだろう。それにパワースポットとはいえ、子供には退屈な場所であることは否めない。

高松は奥社とは反対の、左側に向かって歩き出した。

「中吉だ」

「中吉や」

「中吉！」

「中吉！」

おみくじは4人そろって中吉だった。

「これはこれで凄い確率だな。いやそれでもないのか」

おみくじの確率がどうなっているのかは知らないが、吉、中吉あたりが一番多いような気がする。そう考えれば、さほど珍しいわけでもないのかもしれない。

とりあえず近くの樹の枝におみくじを結び、病氣や災いから守ってくれる幸福の黄色

いお守りを買った。帰りに忘れず旭社に参拝し、表参道で舟々せんべいと石松まんじゅうとうどんソフトクリームを食べて、高松一行は金刀比羅宮をあとにした。

その後、高松は東に向けて車を走らせた。車中では三姉妹がこんぴらさんで買った加美代飴をハンマーで割って分け合っていた。

しばらく車を走らせると、綺麗な砂浜が見えてきた。海を挟んだ向こう側にはドルフィンセンターが見える。

高松は砂浜近くのホテルの駐車場に車を停めた。

チエックインをすませ、その日は温泉に入つてぐつすと眠った。

こうして妹連れの夏合宿が始まった。とはいえ、疲労を抜く目的もあるので、あくまで軽めの夏合宿である。

トレーニングをして、温泉に入る。

トレーニングをして、イルカと戯れる。

トレーニングをして、アスレチック公園で遊ぶ。

トレーニングをして、お城見学に行く。

トレーニングをして、動物園へ行く。

トレーニングをして、水族館へ行く。

トレーニングをして、遊園地へ行く。

「意外と……ちゆうたらアレやけど、なんでもあるもんやな」

客室の窓際に設置されたソファに腰かけて、夜の砂浜を眺めながらタマモクロスはぼそりとつぶやいた。妹たちは遊び疲れたのか、すでに夢の中だ。

「住むには良いところだよ。天災はほぼないし、水不足くらいかな」

「水不足で、このご時世に？」

タマモクロスはいまいち理解できずに首を傾げた。

「まあこれは、地元の人間じゃないと理解し難いだろうな。慣れれば毎年の恒例行事にすぎないんだが」

「水不足が恒例行事ってのもイヤやな」

「最近はかなり頻度が低くなったんだがな。ま、人間にとっては住みやすくても、ウマ娘にとつては違うかもしれない。高知まで行けばトレセン学園があるから、ウマ娘用の施設や用品なんかはそっちの方が揃っている」

地方と中央の大きな差というのは、やはり設備の充実さにある。ウマ娘の才能や才覚については何とも言えないが、設備という目に見えてわかる差は現実としてある。それが成長に差をつけているのもまた事実なのだ。

その辺の事情は脇に置いて、タマモクロスは何とはなしに、訊いた。

「ここはトレーナーの地元なんやろ？」

「ああ」

「実家には帰らへんの？」

「……ああ。言つてなかつたか。実家はもうない。両親が鬼籍に入った時に、土地ごと売り払つた」

高松はこともなげに言い放つ。話を振つたタマモクロスの方が、渴きを覚えてつばを飲み込んだ。

「ダービーの日だった」

當時を思い出すように、高松は無意識に天井を見上げた。

「初めて担当した娘がダービーに出る日だった。本命ではなかつたが、レースの展開次第では優勝を狙えるかもしれない。そんな感じの仕上がりがりだった。そんな時、親父から電話があつた。母が倒れたと。悩んだが、俺はウマ娘を優先した」

タマモクロスは合の手も入れずに聞き入っている。

「結果はまあ、入着すらできなかったが。ともかく俺は泣きじやくるその娘を宥めて、慰めて、寮まで送つていった。その後、実家に戻つたが間に合わなかつた」

語られた記憶は、自分の記憶と重なり、タマモクロスは胸にチクリとした痛みを覚えた。

「そして親父は、男とは脆いものだな。しばらくして母の跡を追うように亡くなった。

遺産整理の折に、家も処分したというだけの話だ」

「……そっか」

何と言つてよいか分からず、タマモクロスはただ静かに頷くだけだった。あの時、高松が有無を言わさぬ姿勢で自分を母の元に連れて行ったのは、そういう背景があつたのだと、タマモクロスは今さらながらに納得した。

「俺は地元が嫌いだった。今でこそ多少発展しているが、俺が子供の頃は何もなかった。だから早く町を出たかったし、家を処分することに何のためらいもなかった」
「……でも合宿にここを選んだっちゆうことは、今は違つてことやる?」

「そうだな。今はそれほど、嫌いじゃない」

テーブルのお茶で喉を潤し、高松はようやく一息ついた。

「すまん。とりとめのない話だったな」

「いや、話してくれてありがとな。もう遅いし、寝よか」

身体が強ばっていることを悟らせまいと、タマモクロスは布団に身体を潜り込ませた。

高松は苦笑しながら、電灯のスイッチをオフにした。

「おやすみ」

その夜、タマモクロスは久しぶりに母の夢を見た。

薄闇の中で、高松はタマモクロスと出会った頃を思い出していた。

目を引くのは脚の長さくらいで、それ以外はてんでダメ。一言で言えば、弱弱しい印象だった。それとは対照的に瞳だけは異彩を放っていた。

それでも、思いだけで勝てるほどレースは甘くない。鍛えて鍛えて、重賞のひとつつたつ勝てれば御の字かな、くらいに思っていた。

だがそれは、良い意味で裏切られた。

今では誰もが認めるG1^{スター}ウマ娘。春のシニア三冠を制し、世代最強とも噂されている。

秋シーズンも、きつとこの娘が主役になる。

この娘は大空へと飛ばたいていく。

そんな輝かしい未来を夢見て、高松は瞳を閉じた。

第17話 秋の始まり

オグリキャップ。カサマツから来た若き怪物。

一目見た瞬間から、何か引つ掛かりのようなものを感じていた。

それがいま確信に変わる。

——コイツとは、長い付き合いになる

それはもちろん慣れ合いではなく、レースという非情の世界で鎬を削り合うということだ。

中央に来てから、実に5連勝。その全てが重賞レース。

これはハッキリと言つて異常である。地方から中央に来るウマ娘は偶にいるが、そのほとんどが涙を流す結果となる。

カサマツでは12戦10勝と聞いたが、むしろ誰に負けたのかが気になってくるレベルだ。

(中央のデビュー戦でGⅢを選択する六平トレーナーにも驚いたが、それに応えるウマ娘も尋常な胆力じゃないな)

さらに目を奪うのは終盤の走り。こんな独特のフォームで走るウマ娘は中央にも

中々いない。

「見れば見るほど、特異なフォームだな」

倒れそうになるほどの前傾姿勢。膝の柔らかさがこの豪脚を生み出しているのだらう。

「ウチもこのフォームを真似れば速なるんちゃう？」

モニターを見ていたタマモクロスが高松に視線を向ける。良いものは取り入れると考えるのは普通のことだ。別に走り方に特許があるわけでもあるまい。だが高松の反応は冷ややかだった。

「アメリカの方の方が大きいな。今のキミの身体能力フィジカルなら不可能ではないと思うが、フォームを改善すればどうしても最初のうちはぎこちなさが出る。今からやれば、秋シニア三冠が怪しくなってくる」

「そりゃあ、美味うまあないな」

春シニア三冠を獲得した折の記者会見で、秋シニア三冠も取ると豪語した手前、無様をさらすことは許されない。

オグリキャップ陣営はすでに天皇賞（秋）への出走を表明しており、早くも世間では葦毛対決に盛り上がっていた。

「あのメガネもあつち鼻屑にしとるみたいやし」

「あの人は、挑戦者の味方だからな。宝塚の時はこつちを盛り上げてくれたじゃないか」
「そういうのを節操なし言うんや」

「彼は誰かのファンじゃなく、ウマ娘のファンらしいから。それに記者として特定の誰かを応援することを避けているようなふしもある」

「もうあのメガネの話はええわ。それよりこつちや」

タマモクロスは再びモニターへと目を向ける。話を振ったのはそつちだろうと、高松はため息をつきながら手元の資料を探った。

「直前でコケる可能性もあるぞ。毎日王冠はそう容易く勝てるレースじゃない」

次にオグリキャップが出走する毎日王冠では、タマモクロスも対戦経験のあるロングリブフリーやダイナムヒロイン、海外遠征から帰ってきたシリウスシンボリなどが出走を表明している。

オグリキャップよりもレース経験豊富なベテランたちだ。これまでのレース映像を見るかぎり、オグリキャップのレース運びは熟達とはほど遠い。

（典型的な末脚ドーンだからな。それで勝てるというのが、末恐ろしいところでもあるが……）

その鋭さは、高松から見てもシニア級の末脚自慢たちと遜色がない。

勢いが勝つか、経験が勝つか。

(なんか、宝塚記念と似てるな)

あの時もタマモクロス勢が押し切るか、アキツテイオー経がシニア三冠を阻止するかと話題になった。

「ま、そこはお手並み拝見といこうやないの」

タマモクロスはニンマリと笑みを零し、モニターの電源を切った。



結果から言えば、毎日王冠を制したのはオグリキャップだった。これまで通り、差しに構えてからの末脚で大外を捲つての勝利。

(こんな勝ち方されちゃうの音も出ないな)

中盤辺りでいささかの駆け引きはあったようだが、それをはねのけての勝利だ。オグリキャップにしてみれば、外が空いてるからそっちに行こう、くらいの感覚だったのかもしれない。

(それはさすがに穿ち過ぎか。内を絞められたら外に行くしかないし。本来なら

オグリキヤツプ¹を外に締め出したほかのウマ娘を褒めるところだろうが……)

それを一蹴しての勝利だ。これは明らかに異質な強さだ。

(そんで天下を獲る、だものな)

秋の天皇賞前に行われた記者会見で、オグリキヤツプはそう意気込んだ。隣にタマモクロス^天がいる場所^下で。それはハッキリと宣戦布告だろう。

そのタマモクロスは、宝塚記念後の記者会見でも言ったように、秋シニア三冠を獲ると宣言した。

メディアは大喜びだ。

各紙が葦毛頂上決戦と一面を飾った。

新聞を畳み、高松はタマモクロスに目を向ける。

あと一時間もすれば、葦毛頂上決戦が始まる。

「なあ、トレーナー。このレース——」

『先行でいってええか』

ふたりの声が重なる。タマモクロスは目を丸くし、高松はニツと笑った。

「考えることは同じのようだな」

「ははっ、せやな」

認めたくはないが、オグリキヤツプの末脚はタマモクロスと同等の域にまで達してい

る。いつも通り後方で構えていては、差し切れない公算が高い。

「逃げるのはトップシユンベツかロードロイヤルか、あるいはその両方。その後ろに付く」

「スリツプストリームでスタミナを温存し、オグリキャップよりも先にスパートする、やな」

オグリキャップとタマモクロス、末脚の最高速は同じだとしても、最高速を維持する時間はタマモクロスに分がある。

タマモクロスに合わせてスパートしても、オグリキャップの末脚は最後まで持たない。

「レース経験の差が違う。オグリキャップはこのレースで、それを思い知るだろう」

単純な出走回数だけなら、オグリキャップの方がタマモクロスよりも多い。だが地方と中央のレベル差は厳然としてある。あくまでオグリキャップが異常であり異質なのだ。

（六平トレーナーが中央で連戦させたのは自信をつけさせるため。だから細かい作戦指示などはしなかったのだろう。まさか全勝するとは思わなかったが）

特にスーパージョーとも呼ばれる毎日王冠を圧勝したのは、高松も予想外だった。シンボリルドルフがダービー出走署名運動に協力したのも分かる気がした。



タマモクロスが先行ポジションでレースを進めるのは、あの事件以来初めてのことだった。デビュー当初は先行でレースを進めることが多かったが、転倒事故によりバ群恐怖症になり、後方一気という追い込み脚質に頼らざるをえなくなった。

その症状を克服した後でも、そのまま差しや追い込みでレースを進めることが多くなった。だが決して先行策ができなくなったわけではない。

先頭^{ハナ}を取ったのはロードロイヤル。タマモクロスはその後ろに付ける形となった。

観客席からは少なくないどよめきが生まれたが、デビューからタマモクロスを応援していたファンからは歓声が生まれた。

(速度を落としよったか。なるほどな、そういう戦略か……)

先頭で逃げるロードロイヤルの背中を睨みつけながら、タマモクロスは心中でつぶやいた。

前半をハイペースで飛ばし、中盤にミドルペースに落とす。それは逃げとしては王道

的な戦略だった。

(そんなんより後ろや。随分と睨まれたもんやで)

振り返るまでもなく感じる、背中を刺すような怪物の視線。気の弱い者なら、その気迫に満ちたプレッシャーから脚が速くなりそうなものだが、タマモクロスは冷静かからずに自分のペースを保ち続けた。

そして最終コーナー手前、ロードロイヤルをかわして最後の直線に入る。

(視界前が開けた。いけるッ！)

余力は十分にある。自分の末脚についてこれるウマ娘は、ただひとり。徐々に詰まってくる差は、だがゴールまで決して埋まらないだろう。

残り200メートル。タマモクロスは確信を持つて脚を震わせた。

(風の音も、脚音も、歓声も、何も聴なんこえへん……)

扉が開く。その内より迸るのは純白の雷光。それすなわち——白い稲妻。先鋭化した意識が世界を加速させる。

その光は、後方から迫るオグリキャップを置き去りにした。

(負ける気がせえへんッ！)

そして彼女は、必勝の笑みを浮かべてターフを駆け抜けた。

第18話 世界との闘い

秋のG I戦線は実にタイトなスケジュールである。俗にシニア三冠と呼ばれる秋の天皇賞、ジャパンカップ、有《font:ul40》馬《font》記念は間隔がそれぞれ約1カ月ほどしかなく、調整には細心の注意を払う必要がある。

（疲れはなさそうだな。あのラストスパートは気がかりだったが……）

上がり3ハロンのタイムは過去最速だった。バ場が良かったというのものもあるが、速すぎるタイムはトレーナーにとつては、あまり嬉しいものではないのだ。

なにせウマ娘の脚は、ガラスの脚と言われるほどに脆い。強すぎる負荷は、いつ故障を誘発してもおかしくない。

（やはりオグリキャップは特別か）

同じ茸毛というだけではなく、タマモクロス曰く、何か運命的なものを感じるらしい。それで気分が昂揚したのだろう。

（しかしさすがにジャパンカップ、錚々たる面子だ）

思考を天皇賞から、次走のジャパンカップへと移す。目の前のPCモニターには参加ウマ娘たちのデータが映し出されていた。

(本命は言わずもがな、凱旋門賞を制したトニビアンカか)

どの雑誌も彼女を本命としている。日本勢はどれだけ彼女に食らいつけるか。来日してからは軽めの調整らしいが、高松はこれを訝しんでいた。

(もしかしたら調整が上手くいつてないのかもしれない。それとも、マスコミに隠れて追い込んでいるとか？ 凱旋門賞制覇が逆に重石になっている可能性があるな)

当然ながら、フランスと日本の芝は違う。むしろ、世界的に見れば日本の芝はかなり特異なケースとなるだろう。それくらい、日本の芝は世界的にも稀な高速芝だ。

(どちらにしろ、彼女は王道的なレースを好むだろう。むしろ警戒すべきは、こっちかもしれない)

データをアメリカ代表のウマ娘へと切り替える。

ミシエルマイベイビー。身長195cmの恵体のウマ娘。タマモクロスとは、文字通り大人と子供ほどの差がある。

(直接ぶつかれば、簡単に弾き飛ばされるだろうな)

体幹うんぬんのレベルではない。単純にパワーが違う。彼女は勝利数こそ少ないが、入着の回数が多い。侮つて良い相手ではない。特に欧米での当たりは、お上品な日本のレースとは比べものにならない。ポジション争いで削られるのは避けるべきだろう。

(あとは、ムーンライトトルナシーとエラスリープライドか)

ムーンライトルナシーは、どちらかといえはスピードタイプだろう。昨年のジャパンカップは5着に終わったが、東京レース場の芝には合っているかもしれない。

エラズリープライドは脚質にスタイルこだわらない器用なタイプだ。本番ではどんな策で来るのか読めない。

(……よし。基本の策は決まったな)

高松はパソコンの電源を落とし、首をゴキリと鳴らした。



「高松トレーナー！ タマモクロスの仕上がりは？」

「万全です」

「トニビアンカ対策は？」

「相手がどんな策を弄しようと、正面から喰い破ります」

「オグリキャップが調子を上げてきています！」

「望むところです」

マスコミの攻勢を、高松は平然と受け流す。歩きながらの取材は、高松が足を止めたことで終わりを告げる。

「ここから先はご遠慮願います。彼女の集中を乱したくないので」

唇に人差し指を当て、マスコミを制止する。彼らが黙つたのを確認して、高松は控え室の扉を開けた。

室内では、タマモクロスがソファに浅く腰掛け、瞑目していた。その身体からはかすかにオーラが漂っているようにも見える。

(間違いない、過去最高の仕上がりに。タマモは絶頂の極みにある)

その光景を見て、高松は身震いした。

「おう、トレーナー。戻ったんか」

「すまない。集中を乱してしまったか？」

「いや、ええねん。いらん心配や」

口調は穏やかだったが、その瞳は爛々と輝いていた。発走が待ちきれないといった感じだろう。

(タマモ、キミほど絶頂とどん底を味わったウマ娘もそうはいまい)

幾多の試練を乗り越え、今のタマモクロスがある。高松は不意に感慨深くなって目頭を押さえた。

「タマモ、最終の策を伝える」

「おう、ドンとこんかい」

「今回は後方に構えよう」

高松は最終の指示をタマモクロスに与える。

「……オグリに追いつけんかもしれないで」

「いや、このレースはオグリキャップも控えるはずだ」

「ほう、その心は？」

タマモクロスは試すように笑みを浮かべて高松に先を促す。

「パドックを見た限りだがな、意欲的なやつらが多そうだ。先行のポジション争いは熾烈なものになるだろう。そこで体力を削られるのはうまくない」

「……なるほどなあ」

「その上で重要なのが、逃げるウマ娘が出るかどうかだ。早いペースか遅いペースか、見極めた上で仕掛けどころを探ってくれ。こればかりは指示できん」

「了解や。今さらペース乱すなんてポカはせえへんわ。ほなら、いっちょ世界、獲つてくるわ」

そう言ってタマモクロスは右手を突き出す。高松は小さく笑って、自分も右手を突き出した。お互いの拳がぶつかり合う。

タマモクロスは控え室の扉を開け、ターフに向かって歩き出した。



『本日のメインレース、国際GIジャパンカップ！ 芝2400M、天候は晴れの良バ場！ 本バ場入場です！』

出走ウマ娘たちが次々とターフへと降り立ち、その度に観客席から歓声上がる。特に、日本勢の登場にひと際大きな声援が上がった。

ゴールドシチー、オグリキャップ、そしてタマモクロス。

『さあ、ついに登場です。世界の強豪を抑えての堂々一番人気。春シニア三冠を軽々奪取！』

(何が軽々か。好き勝手言いやがる)

高松はアナウンサーの紹介に悪態をつく。楽に勝てたレースなどなかった。どれも敵しい闘いだった。何より、その言い方は他のウマ娘に失礼だろう。

そんな高松の心中など知らず、アナウンサーは紹介を続ける。

『世界へ挑む白い稲妻！ タマモクロス！』

彼女が登場した瞬間、海外のウマ娘たちから威圧を込めた視線が送られる。だがタマモクロスはそれを平然と受け流した。

『出走は取り消した2名を除く14名！ 全員、ゲートに入りました』

スタート前の一瞬の静寂。それが——解放される。

『スタートしました！ 正面スタンド前の先行争い！ 飛び出したのはロンググリーブリー！ 外からシャーリースカイも来ています！ そしてオグリキャップも前に出ている！ 現在4、5番手あたり！』

「なにっ!？」

オグリキャップの先行策に、高松は思わず前のめりになった。

（あの位置は……マズくないか？ 後ろにトニビアンカ、後方外にミシエルマイベイビーがいる）

トニビアンカに探られ、ミシエルマイベイビーとはまともにぶつかる可能性がある。（いや、タマモにとつては悪くないが……。タマモは後方3番手か。少し内よりなのが気になるが、良い位置だ）

そして高松の予想通り、ミシエルマイベイビーがオグリキャップに仕掛ける。

（オグリキャップと並んでも、なおデカいな。オグリキャップも負けてはいないようだ）

が……力に力で対抗するのはスタミナを消耗するだけだぞ。どうやらあれを捌く技術は、まだないようだな)

オグリキャップは、元々駆け引きの上手いウマ娘ではない。押し引きの判断がつきかねているようにも見えた。

結局オグリキャップは、ミシエルマイベイビーのパワーに押されて少し位置を下げた。

向こう正面を通過して、タマモクロスは気づく。

(このペースは、ちよい遅いくらいか?)

みんな機を窺っているのだろう。肉体的な疲労よりも精神的な疲労を感じる。

レースは第3コーナーへと差しかかった。

(さすがは世界でも名うてのウマ娘やんな。抜け出す隙があらへん)

絶妙な位置取りでのコーナーワーク。無理に入り込めば、小躯なタマモクロスは簡単に弾かれるだろう。

そこで生まれるロスを考えて、外に出した方が賢明ではある。

タマモクロスは外に進路を取った。

外から速度を上げ、何人かのウマ娘を追い越す。その中には、宿敵の姿もあった。息は乱れ、疲労の色は濃い。

(同情はせえへん。作戦をミスった。それだけのことや)

レースに絶対はない。すべてが思い通りにいくレースなどない。

(この程度で沈むんやったら、それまでのことや)

最後のコーナーを曲がり、レースは終盤へと突入する。

『最後の直線に入ります！ 先頭はメジロデュレン！ トニビアンカはまだ中団か！

大外からタマモクロスが来た！』

(ここや！ ここに一切合切！ 全部ぶち込む！)

『タマモクロスが一気に来た！ 現在先頭！ ゴールドシチーは苦しいか！ トニビア

ンカはまだ来ない！ オグリキャップ差し返すか！ いや内について——』

(来たかつ!!)

背中にぞくりとした気配を感じて、タマモクロスは宿敵が迫ってきたのを悟った。

(いや、違^{ちや}うで。この気配は……オグリやない！)

前走、秋の天皇賞で感じたプレッシャーとは違う気配に、タマモクロスは肩越しに視

線を送った。

(アイツ……かい!?)

『オバイユアマスターだ！ オバイユアマスターが来た！ オバイユアマスターが内に

切り込んで先頭に立った！』

(チィ……ウチとは競り合わんつもりか。けど、逃がさへんで!!)

残りは200mを切ったが、まだ脚は残っている。タマモクロスは残る力を全て注ぎ込み、その末脚を喰らせる。徐々にその差が詰まっていくが、タマモクロスは瞬間的に悟った。

(クビ差……届かへん)

極限まで集中しているからこそ、未来が見えてしまった。

奥歯がギリリと音を立てる。タマモクロスが諦めかけたその時——世界が停止した。

色の消えた世界の中で、奇妙な獣がいた。

目の前に突如として現れたのは、四つ足の獣だった。顔の位置は自分よりも高い場所にある。灰色に近い白の毛色をした、巨大な獣。

首の短いキリン、というのが妥当な表現だろうか。

その巨獣が、じつとこちらを見つめている。

——情けねえな

「な、なんやとツ!?!」

獣が喋ったことも驚きだが、初対面でいきなり罵られ、タマモクロスは面食らった。

——それでも俺かよ

「なんやねん！　いきなり現れてワケわからんこと抜かしよって！」

——二度もアメリカ野郎にやられるなんて我慢ならねえぜ。勝つ気がねえなら、さつさとその身体よこせよ

「はあ!?　せやからワケわからんちゆうねん。身体よこせってなんやねんツ!!」

——まあ、んなこと無理なのは分かってんだがよ

ブルルツと盛大なため息を零す。それがまたバカにされているようで、タマモクロスは激昂しかけた。

——おまえの走りはそんなもんじゃねえだろが。四つ足だろうが二つ足だろうが関係ねえ。魂に刻まれた走りを思い出せ。タマモクロス俺は負けちまったがよ、タマモクロスおまえは負けるんじゃないやねえぞ。おまえが闘うのを諦めやねえかぎり、俺はいつだつておまえのそばにいるぞ

風が吹く。

その風に攫われて、白い獣は消え去った。

世界が、動き出す。

ゴールまで残り50mを切った。この差は覆せないだろう。高松は切歯扼腕したい衝動を必死に押し殺していた。

まさかあのノーマークだったアメリカのウマ娘が、このレースのためだけにずっと三味線をひいていたとは予想だにしていなかった。

（……まで徹底して情報を隠すとは、向こうが一枚上手だったか。まさかこのレースのために……ここまで……？）

半ば勝利を諦めていた高松だったが、タマモクロスとオベイユアマスターの差が縮まっていることに気づいた。

タマモクロスのフォームが、わずかに変化していることにも。

（^{りき}力みが取れた？　なんて美しいフォーム……いや、しつくりくるフォームだ）

オベイユアマスターの流麗なフォームと、オグリキャップの超前傾フォームの、いいところりをしたようなフォームだと感じた。そして直感する。あれこそが、タマモクロスの理想のフォーム、完成系だと。

（この土壇場で掴んだというのか。なんとというレース勘）

これまでも、窮地に立たされることで何かを掴むということはある。追い詰められることで進化する。それがタマモクロスというウマ娘の真価であるのか。

『外からタマモクロスが伸びてくる！　先頭は依然オベイユアマスター！　この2人だ！　この2人だ！　オベイユアマスターが逃げる！　負けられないタマモクロス！』

実況が興奮気味にまくしたてる。ターフを駆ける二筋の軌跡。そして、黒き流星を白

い稲妻が喰い破った。

『タマモクロス！ タマモクロスです！ タマモクロスがわずかに前！ タマモクロスがジャパンカップを制しました!!』

◇

「おめでとう。タマモ」

「トレーナー！ 聞いてんか！ なんかな！ 変なんに会^おうたんや！」

タマモクロスは興奮冷めやらぬ様子で、高松のもとに駆け寄ってきた。

「変なん？」

「そや！ なんかな……こう……こう……あれ？ なんやったつけ？」

「いや、俺に訊かれてもな」

タマモクロスがコテンと首を傾げる。それを見た高松は苦笑した。そして、頭頂に疑問符を浮かべているタマモクロスにタオルとドリンクを渡す。

「まあ、話はあとでゆっくり聞こう。まずはウイニングライブだ」

「ん、せやな。ウチのセンターはもう見飽きたかもしれんけど、ちゃんと見といてや！」
そう言って、タマモクロスは駆けて行く。

結局、彼女が出会った「ナニカ」を思い出すことはなかった。

第19話 グランプリ

タマモクロスは、世代の中では傑出した存在ではなかった。耳目を集めていたのは、後にダービーを制することになるメリービュートイーや、皐月賞・菊花賞の二冠を達成したサクラスターオー。

あるいはその容貌から注目されていたゴールドシチーやマックスクイーン。

タマモクロスは知る人ぞ知るどころか、相当コアなウマ娘ファンでも知っているかどうかというレベルだった。

学内での競走成績も低く、トレーナー契約もギリギリになって滑り込むようなタイミングだった。

だがそれが、タマモクロスにとつての僥倖だった。

とあるニュース番組で、あるコメンテーターが言った。

タマモクロスは本格化が遅れていただけで、元々素質のあるウマ娘だった。トレーナーが誰であっても、いずれG1レースを制しただろう、と。

だがタマモクロスはそうは思わなかった。自分に素質があったとしても、それを開花させてくれたのは紛れもなく彼であろうと、そう思っていた。

翌日から、そのコメントーターの席はなくなっていた。何故かは分からないが。

ジャパンカップの激闘は、タマモクロスに少なくないダメージを与えていた。楽なレースにはならないと踏んではいたが、思わぬ伏兵によって予想以上に苦しめられた。

宿敵オグリキャップでもなく、覇者トニビアンカでもなく。

しかし収穫もあつた。

高松はノートパソコンに2つの映像を映し出した。ひとつはジャパンカップの映像。もうひとつは、先ほど撮影した練習中の映像だった。

一見するとどちらも同じフォームに見える。

「だがキミは、何かが違うと感じたんだな？」

高松の問いに、タマモクロスはコクリと頷いた。

「おそろくだがそれは、状況の違いじゃないかな？」

「状況？」

「あの時のキミは、普通の状態ではなかった。身体的な意味では、疲労の限界に達していた。ヒトは疲れた時、もつとも楽な、無駄のない動きをする。その上で、勝つか負けるかの瀬戸際。脳内麻薬がこの上なく分泌されていただろう」

例えばβエンドルフィン。これは苦痛を取り除くときに最も多く分泌される。レースの終盤、もつとも苦しい時間。脳内でそのストレスを軽減するためにβエンドルフィ

ンが分泌され、やがて快感や陶酔感を覚える「ランナーズ・ハイ」と呼ばれる状態に変化する現象はよく知られている。

例えばノルアドレナリン。これが過剰に分泌されると、交感神経の活動が高まる。その結果、血圧や心拍数が上昇し、身体を活動に適した状態にする。ざっくり言えば、身体能力を覚醒させてパフォーマンスを上げる効果がある。

「……つまり、どういうことや？」

「フォームが完全に合致しても、練習ではあの時と同じ感覚は得られないということだな」

タマモクロスは、ひとりタイムアタックで走るよりも、レースで走る方が良いタイムが出やすい。それは彼女の生まれ持った闘争心のなせる業であろう。

（だがそれは、大きな危険も孕んでいる）

限界を超えた走りは、故障を誘発する。経験によってある程度危険なラインは把握しているだろうが、勝つか負けるかという瀬戸際では、本能がかかるべきブレーキを誤るのだ。高松はそれを恐れていた。

タマモクロスは、いわゆるタフなウマ娘ではない。一晩ぐつすり眠れば、疲労回復・元氣一杯というタイプではない。

体調を崩しやすく、事実、高松が管理する以前は季節の変わり目にはよく体調を崩し

ていたらしい。それは赤貧からくる栄養バランスの欠如にも関係はあるだろう。まあ彼女が言うには、赤貧ではなく他家ほかよりほんのちよつと貧しかっただけらしいが。

ともかく、ジャパンカップから2週間ほど経って、食堂からタマモクロスの食事が落ちていると報告があった。

栄養管理はアスリートにとっては必須である。当然、高松もタマモクロスの体調には細心の注意を払っていた。

(やはりジャパンカップの激戦の疲れが抜けきっていないのか)

当然だが好不調の波は誰にでもある。トレーナーの仕事は、ウマ娘を万全の状態で、絶好調の状態でレースに送り出すことだ。

肉体のケアをし、精神こころのケアをする。当然のことだ。だが思春期真ただ中のウマ娘たちは、思いもよらないところで心身のバランスを崩したりする。

今回のそれは、幾分か分かりやすい分助かつたくらいだった。

つまり、高松は休息を取るべきだと判断した。

「そんなわけで温泉に来た」

「どんなワケやねん！」

温泉旅館を前にして、タマモクロスがビシイとツツコミを入れる。

「合宿ちやうねんか!？」 有《font:ul40》馬《font》記念に向けての追

込みつちゆう話やったんちゃうんか!？」

「ああ、あれは嘘だ」

高松は平然と言い放った。その物言いに、タマモクロスはツツコミも忘れて呆然とした。

「少し、気を張りすぎだ。焦っているようにも見えるな。適度の緊張は良い作用をもたらすが、キミを見てるとそれが過剰に感じられた。だから、今はこれでいい」

「せやかてトレーナー!」

春秋シニア六冠、年間無敗、年度代表ウマ娘。それらが急激に現実味を帯びてきた。マスコミは有《font:ul40》馬《font》記念をタマモクロス一強と報じており、オグリキャップ、ディクタストライカ、スーパークリークらの若い世代が、その牙城を崩せるかなどと特集している。

嘘か真か、URAなどはすでに式典の準備までし始めているらしい。

勝つことが既定路線になり、勝つことが当たり前とされている。それがどれほどのプレッシャーとなっているのか。高松ほど年輪を重ねた人間でもプレッシャーを感じているのだ。それがタマモクロスにはどれほどの重圧になっているのか、彼には想像もできなかつた。

「心に霞がかかったままでは、勝てるものまで勝てなくなるぞ。今は休暇を楽しもう

じゃないか」

「……はあ。トレーナーにはかなわんな」

あつげらかんと見とれていたタマモクロスは、諦めたようにため息を零した。

玄関をくぐると大勢の従業員に迎えられ、部屋へと案内される。

そこでタマモクロスはハタと気づいた。

「なんで別部屋やねん！」

「いや当然だろう」

高松は何言つてんだコイツ……と言外に視線を送った。

「夏合宿では一緒やったやんか」

「あの時はキミの妹たちが一緒だったからな。保護者としてはあまり目を離したくなかったんだ」

「……せやかて、もつたいないやんか！」

タマモクロスはお金に関してはシビアである。ただそれだけだ。他意はない。

「心配しなくても、金を出すのは俺だ」

「部屋代を食事に回した方がええやん！」

ずいぶん食い下がるな。そう思いながら、高松はどう返答すべきか悩んだ。とそこへ、後ろで荷物を持っていた従業員が控え目に提案を口にする。

「あの、でしたら部屋をひとつにして、食事のランクを上げることでも可能ですが……」
「こちらの都合でそんなことは……」

「お姉ちゃんええこと言うた！ ほなそれで頼みますわ！」

高松がなにか言う間もなく、タマモクロスの一声でそう決まった。

「ほな荷物置いたら早速風呂いこか。もちろん風呂は別々やで！」

「当たり前だ。ここに混浴はない」

何故か上機嫌になったタマモクロスと共に、露天風呂へと向かう。

その温泉は疲労回復に効果があるらしく、確かにタマモクロスは自分の身体がリフレッシュしたように感じた。

紅葉の名所らしいその場所は、しかし時期が遅かったらしく見頃ではなかったのが残念だった。



有《font:ul40》馬《font》記念の控え室。さしものタマモクロスも

若干の緊張を感じていた。前人未踏の記録がかかっているのだ。無理もないことだった。

「タマモ、最終指示を伝える」

「お、おう。ドンとこんかい！」

タマモクロスが自身の胸をドンと叩く。距離と音量が合っていないが、高松は気にしなかった。

「気楽に行こう」

「……はあ!？」

高松の気の抜けたような言葉に、タマモクロスはあんぐりと大口を開けた。

「気楽に、気持ちを楽しみに、キミの好きなように走っていい。キミの、タマモクロスらしいレースを見せてくれ」

「……ぷはっ、なんやそれ。真面目くさった顔で言いよつてからに。作戦でもなんでもないやんか」

緊張が解けていく。双肩に重く押し掛かっていたなにかが崩れ去っていくような感覚だった。

「グランプリレースはお祭りだ。楽しんでこい」

軽く右手を突き出す。タマモクロスは迷わず自分の拳をそれに合わせた。

その拳から伝わってくる信頼と情熱と信念に、彼女の心は熱くなった。年末のお祭りが始まる。

タマモクロスは意気揚々とターフへと向かった。

◇

好きに走れと言われたタマモクロスは、自分が一番らしいと思つた場所、後方の位置を選んだ。

中山の直線が短いのは周知の事実だが、最終コーナーで好位にいれば問題ない。

2500mという距離は、タマモクロスにとってはさほど問題のある距離ではない。この小さい身体に凝縮されたスタミナは、出走メンバーの中でもトップクラスである。

しかしスタミナが豊富だからといって、2500mを楽に走りきれるわけではない。レースはそんなに甘くない。

スタミナの配分、他のウマ娘との駆け引き、そこにレースの妙味がある。

だがタマモクロスは、このレースで駆け引きらしい駆け引きをするつもりはなかつ

た。何故なら彼女は、絶好調だったから。かつてないほどに絶好調だったから。小手先の小細工など必要とせず、力で押し切れると判断したから。

大歓声のスタンド前を通過し、レースは向こう正面へ。そこでタマモクロスは仕掛けた。

まずはその力を見せつける。意気を削ぐ。向こう正面に入ったタイミングで、タマモクロスは領域を展開した。

——白い稲妻

彼女の代名詞でもある、強烈な末脚。それを、この中盤で発動した。

最後方では、スタートで、ゲートと接触事故を起こした、デイクタストライカが血に塗れながらその背を睨みつけていたが、タマモクロスは一顧だにしない。

視界が開けた大外から、一気に駆け上がる。最後方から3番手まで。前にはふたりのウマ娘を残すのみ。

ここでタマモクロスは息を入れる。これ以上は終盤の末脚が使えなくなる。いくらタマモクロスといえども、無尽蔵にスタミナがあるわけではない。

先頭はお馴染みロードロイヤル。その1バ身後ろにオグリキャップ。

オグリキャップは、タマモクロスの気配に合わせて自分も位置を上げた。オグリキャップの策は至極単純なもので、タマモクロスよりも前でスパートをかけるといふものだった。

ジャパンカップもそうしようと思った。だが失敗した。だからこそオグリキャップは、後方のタマモクロスの気配に敏感だった。

だがそれはすでにタマモクロスの術中だった。オグリキャップはタマモクロスに動かされたのだ。

タマモクロスの後ろにはスーパークリークがいた。タマモクロスに負けないほどのスタミナを有したウマ娘。前方でライバルのふたりが競って、スタミナを消費してくれるなら、彼女にとってこれほどありがたいことはない。

最後の直線で全員まとめてかわす。一瞬の隙も逃すまいと、スーパークリークの双眸は爛々と輝いていた。

最終コーナーを曲がり、最後の直線へ。ここでデイクタストライカが来た。若い世代の中で、最も練度が高く、最も領域を理解しているウマ娘だった。

栗毛の弾丸が駆ける。傷を負いながらも、血に塗れながらも、最強を証明するために、彼女は駆けた。

先頭を行くロードロイヤルは軽い恐慌状態にあった。先頭に立ってレースを支配し

ようとした彼女の目論見は、タマモクロスの一蹴によって破綻した。レースはもみくちゃにされ、混乱状態になった。前にいてもその気配は伝わってきた。

そしてすぐ後ろからは茸毛の怪物の圧をヒシヒシと感じる。

残り約300m。ロードロイヤルは直観的に、これは最後までもたないだろうなあと悟った。

そんなライバルたちの思惑を打ち砕くように、タマモクロスは本日2度目の領域を發動した。それに合わせるように、オグリキャップも豪脚を唸らせる。

残り200m。オグリキャップは先頭に立った。この時点で、身体半分ほどオグリキャップがリードしていた。この差を最後まで維持できれば勝てる。

オグリキャップはそう信じて、ひたすらに脚を回す。

(そういえばこの位置でコイツの背中を見ているのは初めてかもしれないなあ)

タマモクロスは、オグリキャップの背中を見ながらそんなことを考えていた。精神をさらに奥へと沈め、タマモクロスはその最奥へと至る。

閉ざされた扉を開く。偶発的ではなく、確信を持って押し開く。扉を押す自分の手に、ゴツゴツとした誰かの手が重なる。

稲妻は速度の壁を突き破り神鳴カミナリとなった。

タマモクロスは風を超え、光となった。

「感じた？ ルドルフ」

「ああ。キミもか、マルゼン。まさか、トウインク^のルシリース^{段階}で至るとはな」
領域。

それはウマ娘がひとつ上のステージに進むための可能性。

その先にあるもの。第二の扉。領域の奥にあるさらなる領域。

領域が知覚の増大ならば、それは知覚の限界を超えた先にある能力の開花を意味する。

明鏡止水の果てにある無我の境地。

すなわち、ゼロの領域。

ただし、限界を超えた先にある能力が故に、肉体的、精神的な負担は凄まじいものになる。そしてそれは、自分の意思でコントロールできるものではないと言われている。

シンボリルドルフほどのウマ娘でも、制御できるようなったのは
ドリーム・シリーズ^{ひとつ上のステージ}に上がってからである。

（それをタマモクロスは、制御している。なんとという才覚！ なんとというウマ娘！）

シンボリルドルフは身震いした。それは無自覚の武者震いであった。

（しかし真に恐ろしいのは……）

シンボリルドルフはチラリと視線を後方へと移す。

（オグリキャップは完全な覚醒には至っていない。にもかかわらず、タマモクロスに追隨している。引つ張られているというのもあるだろうが、なんとという怪才か！）

シンボリルドルフの称賛など露知らず、オグリキャップ当の本人は興奮の最中にいた。

最後の直線、レースで最も苦しい時間。確かに苦しい。息をすることすら。だがオグリキャップはこの超高速の世界の中で、初めてタマモクロスきせの領域に踏み込めたのだ。

（楽しいなオグリ。ウチはアンタと走つきせとる時が一番いっちゃん楽しいわ。なんでやるな）

（私もだ、タマ。負けて悔しい。次は勝つ。そう思いながら走ってきた。今もそうだ。でも楽しい。だがやはり、負けたくないな）

（ははっ、負けず嫌いやな。けど、ウチはもつと負けず嫌いや。せやから一番は渡さへん）

加速する世界の中で、ふたりは笑っていた。この楽しい時間が、ずっと続けばいいと思うほどに。

走り、競い、そして勝利を目指す。

——それがウチの

——それが私の

そしてすべての競走ウマ娘たちの。

——存在証明

夢が駆ける。ふたり並んでゴールインは、しなかった。

ゴール板を一番に通過したのはタマモクロス。

その瞬間、ターフに祝福の雨が降り注いだ。

第20話 希望の未来へ

年度代表ウマ娘とは、年間でもっとも活躍したウマ娘に送られる賞である。その荣誉ある賞は、タマモクロスではほぼ決まっていた。というよりは、タマモクロス以外が選出されれば暴動が起きるだろう。

それくらい、今年のタマモクロスの活躍は突出していた。

表彰式自体は年が明けてからだが、高松とタマモクロスにはURRから事前に通達されていた。賞金などはなく、渡されるのは表彰状とトロフィーだけで、いわゆる名誉のみだが、貰えるものは貰っておく。

そして目録に通例である新勝負服がないことに気づいた高松は、ああ、そういうことかと察した。

そのことが実際に告げられたのは、年末の理事長室だった。

「まずはおめでどうと言わせてもらう。タマモクロス、高松トレーナー」

祝着と書かれた扇子をバツと広げ、トレセン学園の理事長である秋川やよいは豪快に笑った。

「ありがとうございます」

「どうもです」

祝いの言葉は散々言われたので少々食傷気味だが、トレセン学園のトップの前でそんな態度を見せるわけにはいかない。

とはいえ、タマモクロスは疲労もあつて辟易していたようだったが。

「ふむ。前置きは省はぶこうか。キミたちの進路について話したい」

それを敏感に感じ取ったのか、やよいはすぐさま本題に切り込んだ。

「^{スケジュール}進路でつか。去年通り、金杯から始めたいとこやけど、疲れもあるし……どうしようか。トレーナー」

「ああ、それなんだがな」

高松は困ったようにこめかみを搔くと、やよいに視線を向けた。それを受けたやよいは、隣にいた秘書に目を向ける。

「はい。タマモクロスさん、おめでとうございます。あなたのドリーム・シリーズ昇格が正式に決定しました」

パチパチパチと控えめな拍手を送りながらたづなは告げる。それを受けたタマモクロスはなんとも微妙な表情を浮かべた。

「あく、それはまあ、嬉しいんですけども。うーん、あと1年トウインクル・シリーズで走るっちゅうわけにはいきませんか？」

タマモクロスはオグリキャップとの決着がついたとは思っていない。走ったのは2000m、2400m、2500mだけ。他の距離ならば分からない。3200mで負ける気はしないが、マイルならば分からない。

オグリキャップの本領はマイルでこそ発揮される。だからこそタマモクロスは、マイルでオグリキャップと勝負したいという気持ちもあつた。

「いきません」

しかしそれはあつさりとはつづなに却下された。

「あなたにはふたつの選択肢があります。ドリーム・シリーズに昇格してレースを続けるか。引退するかです。無論、引退後の進路については最大限配慮致します」

「引退して……なんでそんな……」

困惑するタマモクロスの肩に、スツと手が置かれた。

「俺が説明しよう。タマモ、キミは強くなりすぎてしまったんだ。トゥインクル・シリーズはキミの草刈り場ではない。若い世代の芽を潰しかねないんだ」

事実、前走の有《font:ul40》馬《font》記念でもタマモクロスの威に当てられたウマ娘は、少なからずいた。スターウマ娘が集う有《font:ul40》馬《font》記念でさえそうなのだ。

本人に自覚はないだろうが、URAの判断は妥当であろう。

ドリーム・シリーズに昇格するための条件は、未だに秘匿されている。だが当然ながら、URAには確たる指標があるのだろう。タマモクロスはそれに引つかかった。認められた。そういうことである。

「せやけど、オグリはこれからもっと強うなるで」

「だろうな。怪我や、大きく体調を崩すことがなければ、オグリキャップも来年昇格してくるだろう」

タマモクロスという目標がなくなることがどう影響するのは分からないが、彼女には多くのライバルがいる。闘う意欲が無くなるといったことにはならないだろう。

「怪物退治は中断だ。来年は皇帝の玉座を狙いに行く。無論、キミの同意が必要だが」
選ぶのはキミだ、と高松は続けた。

数多くのレースを優勝し、タマモクロスの懐ふとこみは潤っている。グッズの収入もあるし、コラボ商品なども発売されている。

テーブルの上にあるブラックなんちゃらというチョコ菓子もそうだ。白い稲妻味ホワイトチョコは大層人気らしい。

つまり、ここで競走生活を終えて、のんびり過ごすというのもひとつの選択肢ではある。

レースには大きな危険が伴う。骨折程度ならまだしも、後人生のちに大きな影響を与える

大怪我をする可能性だつてある。

その危険性はタマモクロスも、いやタマモクロスだからこそ理解している。だからこそ、ここで引いてもいい。高松はそう思っていた。

だがタマモクロスの中に灯る火は消えていなかった。ドリーム・シリーズを駆け、宿敵の到来を待つ。

彼女は高松に向けて、スツと手を差し出した。

「これから、よろしく頼みますわ。トレーナー！」

オグリキャップとの出会いが宿命なら、彼との出会いは運命だと感じた。

栄光と凋落を共にし、死生契闊の道を歩んできた。

温かく、ゴツゴツした手を握りしめながら、彼女は笑った。